空間・社会・地理思想 5号 37-61頁，2000年
Space, Society and Geographical Thought

わが国の兵要地誌に関する一研究
—書誌学的研究—

源 昌久*

0 はじめに

今日は，日本地理学史の研究を行う上でわが国の軍事と地理学との関係について考察しなければならない時機ではないかと思われる．第二次世界大戦後これまで，地理学研究者は，この関係についてほとんど言及していない．その理由は，様々な原因から生じている．敗戦後，軍当局による旧植民地・軍事関係書類の廃棄・焼却処分，占領軍の連合国軍総司令部（GHQ；General Headquarters）の指示によるそれらの資料の廃棄・閲覧禁止，研究者自身のモチベーションの欠如等があげられる．しかし，前述のような制約が次第に解き放される環境に移行してきた．筆者は，今回，いわゆる日中十五戦争（1931-45 年；満洲事変，日中戦争（支那事変），太平洋戦争（大東亜戦争）の総称）において陸軍が関与した兵要地誌類に関する目録を作成し，若干の分析を試みた．これまで空白に近かった兵要地誌作成・編纂のメカニズムに対して書誌学的視点からひとつの研究素材を提供してみた．

兵要地誌作成・編纂に従事した研究者の知識（知の遺産）は，現在の地理学界にどのように受け止められているのかという点についても検討を加えた．今回の作業で兵要地誌目録を作成するにあたり，駒沢大学図書館，防衛研究所図書館，国立国会図書館の三館の蔵書に限定した．他の図書館等に関する調査は後日に期したい．今後，兵要地誌と同様な役割を軍事行動で果たした兵要地図についても目録を作成し，後日に発表する予定である．

I 「兵要地誌」の大要

1．語義

はじめに，兵要地誌あるいは兵要地理の語義について述べてみよう．「兵要」は中国（漢）語彙で，語義は“軍事の枢要”であり，中国の古典中で使用されている（諸橋 1956:85）．後に日本文に入り同義に使われたと思われる．さらに，兵要に地誌（理）が複合して兵要地誌（理）が生じたと推測される．わが国において，語彙 兵要地誌（理）の初出例を確定することは出来なかった．初期の使用例として，『兵要日本地理小誌』全３巻（［中根 淑著］ 陸軍兵学寮 1873［紀元2533］年１月刊行）がある．本書は広い読者層に親しまれたが，序にて，“此書本陸軍諸士ノ為ニ設ク”（［中根］1873:第１巻 第２丁(オ))[1] と記されている．このことから著者は，当初，本書を軍人向きに執筆したのであろと推し量る．タイトルに表記されているように，内容は兵要地誌（内乱を想定しているのか）である．兵要地誌（理）は英語で Military Geography である．兵要地誌の同義語として戦争地理が考えられる．[2] 小川・太田（1937：３）は，“一般に戦争を地理学上より論ずる分科を戦争地理学と呼ぶべきで，…”とし，戦争地理学（広義軍事地理学）（Polemogeography）(Kriegsgeographie)を一．陸戦地理学（狭義軍事地理学）（Military G.）（Landkriegsg.）と二．海戦地理学（Naval G.）(Seekriegsg.)に分けて説明をしている．

2．兵要地誌（理）の３タイプ

研究対象へのアプローチの仕方から兵要地誌（理）を３タイプに分類してみよう．[3] １．総合的あるいは系統的に兵要地誌（理）に関する理論，戦略等を考察するタイプで，Systematic Military Geography と呼称されるものである．２．兵要地誌（理）に関する事項の

* 淑徳大学社会学部

内，特定の主題に焦点を決めて研究を行うタイプで，Topical Military Geography と呼称されるものである．例えば，衛生兵要地誌．3．兵要地誌（理）の研究を特定の軍事地域に応用するタイプで，Regional Military Geography と呼称されるスタイルで，地域研究の一種と考えられる．2と3との混成型もある．

兵要地誌（理）は，基本的に戦略・作戦と結び付き，事前の準備・用意の役目を果たす応用地理学といえよう．[4]

3．兵要地誌（理）作成法

わが国における兵要地誌（理）を作成（軍では「調製」の語を使用）する仕方は，情報源（データ）の入手法によって3タイプに分けられる．

第一に，国防および用兵事項を扱う陸軍の軍令統轄機関 参謀本部等に既刊の関係資料を集め，それらを利用し，編纂して作成された兵要地誌がある．既刊の文献の種類には，現地軍の報告，兵要地誌，兵要地図類がある．例えば，本タイプの例として，IIIにおける No.23-A，No.50．

第二に，担当兵が現地調査を実施した結果の記録，つまり現地報告書（兵要調査資料）タイプのものがある．これは基礎（兵要）資料としてオリジナリティを多く含む．例えば，本タイプの例として，III における No.20，No.45．

第三に，第一と第二のタイプの混成した地誌がある．既刊の資料に最新の現地報告を加えて作成したもの．例えば，本タイプの例として，III における No.26，No.57．

なお，現地において情報を入手する法として，現地調査・実地踏査をはじめとして，駐在武官室・工作機関の活用（例えば，国境の航空写真撮影），外務省の公館や各商社への軍人の「モグリ」込みによる調査（例えば，上陸附近の状況探査）等があげられる（杉田 1958:4-5）．

4．調査マニュアルの存在

わが国の兵要地誌（理）について作成用調査マニュアルは，筆者の調査した範囲では以下の3点をみいだした（調製年順に記載）．

1）北支那方面軍司令部［著］『昭和十五年度北支那方面軍兵要地誌調査計画』［出版地不明］［出版者不明］1940年2月2日，［6］頁［附表］［4］枚，（マイクロフィルム資料『旧陸海軍関係文書目録』[5] T（文献番号）976）（表紙に「軍事極秘」の捺印）

本計画（マニュアル）は，昭和十五年度北支那方面軍兵要地誌調査計画を実施するために作成された．方針，調査要目，調査要領の三項目に分けて解説を行っている．方針について，“調査ノ重点ヲ今次事変［筆者注：支那事変］処理ニ直接必要ナル諸調査ニ指向シ併セテ将来ノ対西北作戦準備ノ為ノ諸調査ヲ行フ”としている．附表において，各部隊が担任すべき調査事項を詳細に列挙している．

なお，本資料中に，（マニュアル）“昭和十三[1938]年二月一日参謀本部調製「兵要地理資源調査報告例規」”（筆者未見）がタイトルのみを掲載している．

2）大本営陸軍部[著]『兵要地理調査参考諸元表（其ノ一）』［東京］大本営陸軍部 1945年5月 29表（表表紙に「極秘」と印刷）

1944-45年頃，米軍による本土上陸にたいする防御のために国内（本土）の兵要地誌の必要性が感じられた．本表は，そのための兵要地理調査用基礎的諸元を収録している（本資料に付されている手書きメモおよび前言を参照）．

内容（構成）は，航空作戦，対上陸作戦，地上作戦の三項目である．各項目の内を細分して，表形式で解説を行っている．

3）石井部隊 村上少佐［著］『教育資料 兵要地誌調査研究上ノ着眼』［出版地不明］［出版者不明］［出版年不明］［3］頁 謄写版（手書き）（表表紙に「秘」の捺印）

内容（構成）は，1．地形地質 2．河川 湖沼 湿地 3．気象 4．宿営給養 5．給水 6．住民地の六項目を設定し，各項目に説明を付している．

上記以外にも，多数のマニュアルが作成・刊行されたと思われる．それらについては，後日，みいだし，発表してみたい．また，マニュアルに関する根拠法および雛形についても調査しなければならない．

II 作成（編纂）組織およびその変遷

1．中央機関

最初に，中央機関における兵要地誌作成（編纂）組織の変遷をみてみよう．

1873 年 3 月 23 日，陸軍省職制並条例により，陸軍省の外局であった“参謀局ヲ第六局ト改称ス”（堀内・平山 1986:29）とし，ここに第六局が設置された．その任務は，“第六局 陸軍文庫 測量地図 絵図彫刻 兵史並兵家政誌蒐輯 … 一兵史蒐輯並ニ出版ノ事 以上主管［筆者注：文庫の主管］之ニ任ス … 一日本並ニ外国ノ兵家政誌ニ関スル書籍ノ採集ノ事 …”（内閣記録局 1977：394-395）であった．局内に陸軍文庫を併設した．この「文庫」は Collection ではなく Library の意味である．前述の第六局（陸軍文庫）が近代日本における兵要地誌作成（編纂）機関の始まりではなかろうか．Ⅰの 1 において記載した『兵要日本地理小誌』の再刻（版）である『兵要日本地理小誌』改訂（1875 年 7 月）の出版者名が陸軍文庫（初版は陸軍兵学寮）であることからもうかがえる．1874 年 2 月 22 日の陸軍省への達において，“其省中第六局被廃参謀局被置候條此旨相達事候 但陸軍文庫ノ儀ハ同局中ノ一部ト可相心得事”（内閣記録局 1977：398）と記され，第六局を廃して，参謀局を設置し，参謀局が陸軍文庫を管理することになった．

以後，明治・大正中期まで兵要地誌作成（編纂）機関は変遷を経て，1920 年 8 月，参謀本部第二部第五課[5]（欧米課），および第六課（支那課）が担当することになる（1916 年 5 月—1920 年 8 月においては第二部第五課が行う．通称　兵要地誌）．第五課には第 1 班（ロシア），第 2 班（英国），第 3 班（米国），第 4 班（ドイツ），第 5 班（フランス），第六課には第 6 班（支那情報），第 7 班（兵要地誌）から構成された（秦 1991：480）．ただし，第 1 班から第 6 班における兵要地誌作成の詳細は不明である．1936 年 6 月，管掌内容の変更が行なわれ，第二部第五課はソ連情報（欧米課から分離新設），第六課は欧米情報，第七課は中国（支那）情報を担当し終戦を迎えた（秦 1991：481）．第二部第五課の班区分は軍情，兵要地誌，第 10 班（文書諜報）で，第七課の班区分は支那班と兵要地誌である（日本近代史料研究会 1971：382）[7]．

前記の参謀本部の系列とは異なる大本営陸軍部参謀部[5]の系列が存在する．1937 年 11 月 20 日，大本営陸軍部が設置された．参謀本部職員の大多数は，大本営陸軍部の職員を併任した（秦 1991：499）．業務分担も両機関で共通するものが多くみらる．

1937 年以降終戦まで，大本営陸軍部においての兵要地誌作成（編纂）は，第二部第五課，第六課，第七課が担当した．「大本営陸軍部参謀部担任業務区分表」によると，（区分）第二部第五課の（担任業務）は“対蘇作戦情報ニ関スル事項 … 兵要地理ノ調査及情勢判断ニ関スル事項”，（区分）第二部第六課の（担任業務）は“対英米作戦情報ニ関スル事項 … 兵要地理ノ調査及情勢判断ニ関スル事項”，（区分）第二部第七課の（担任業務）は“対支作戦情報ニ関スル事項 … 兵要地理ノ調査及情勢判断ニ関スル事項　測量，地図調製，兵要気象調査ノ一般ニ関スル事項”（大本営陸軍部 1943：ノンブルなし）と記されている．この記載から各課が各担当地域を分けて，兵要地誌を作成（編纂）していたことがわかる（前記の参謀本部第五課および第六課参照）．

中央機関における兵要地誌作成（編纂）組織は，上記の他，陸軍省調査班（Ⅲの No.12 参照）がある．しかし，本組織に関しての詳細は，現時点において不明である．

2．現地における作成組織

1 において述べた 作成システムが中央とするならば，周辺である現地と称すべきところで兵要地誌を作成する組織があった．1937 年，日中戦争以降，戦域および作戦実施予定域である現地において兵要地誌が現地軍によって作成されはじめられた（神谷 1995：104）．Ⅲの目録においても，1938，39 年頃から北支那方面軍，その他の現地部隊がかかわった兵要地誌類が目立つ．現地軍の内でも（参謀部）兵要地誌班あるいは軍医（部）が携わっていることが多い．

3．兵要地誌作成(編纂)作業に従事した学徒・研究者

兵要地誌作成(編纂)作業に従事した地理学徒は，上記 1・2 の両ケースにおいても多数，存在していたであろう．このような状況を渡辺（1960:148）は，“各地に従軍した学徒の中には，現地で兵要地誌班に徴用されて地域調査した者が多かった．”と述べている．

地理学および関連分野の研究者が兵要地誌作成(編纂)作業に従事した例をみてみよう．筆者は，日中十五年

戦争等にかかわった地理学者を収載している『続・地理学を学ぶ』[9)]を調査した．その結果，5 名の兵要地誌作成(編纂)作業に従事した地理学者を検索した．以下，該当部分を本書の記載順に取りあげてみよう．

1）米倉次郎（1909- ）

本書（正井・竹内 1999：18-19）において次のような対談がなされている．

——どのようなお仕事［筆者注：シンガポールにおいて］をなさっておられましたか．
米倉 参謀二課の調査っていうんですが，…，

『南方軍総司令部参謀部兵要地誌班回顧録—岡さのへち会記念文集』中にも，当時，米倉が兵要地誌作成に従事していた様子を自ら記述している（神谷 1995：129-138）．『南方軍…』の記述から対談中の「参謀二課」は，正式には「南方軍総司令部参謀部第二課」（後に，兵要地誌班）であることがわかる．

2）吉崎恵次（1914- ）

本書（正井・竹内 1999：120）において次のような対談がなされている．

—— それからは？
吉崎 それで東京に来て．参謀本部の第二部第六課の兵要地誌班に着任しました．…

前記の対談は，1945 年当時の状況である．従って，II の 1 から「参謀本部の第二部第六課」は，欧米情報の担当ということになる．

3）千葉徳爾（1916- ）

本書（正井・竹内 1999：178）において次のような対談がなされている．

竹内 戦地での観察のことをふつうは余り書いておられないのですが，千葉先生はものすごく多いですね．先生の禿げ山に関する関心は始めはやはり興安嶺ですか．
千葉 兵用地誌調査隊長として興安嶺を歩いたとき山の南側と北側で植生が違い，地形も違うと気がついたわけです．…

千葉は，以前に執筆した『はげ山の研究』中で，“顧みれば第二次世界大戦中に軍務の傍，大興安嶺の一角で…”（千葉 1991:1）とのべている．これらの記述から千葉は，中国東北部の現地軍において兵要地誌作成に携わっていたことがわかる．なお，千葉の発言は，戦中の兵要地誌作成調査における知の遺産が現在に連続している地理学史上の実例として貴重である．

4）町田 貞（1918- ）

本書（正井・竹内 1999：282-283）において次のような対談がなされている．

町田 私どものクラスだけが海軍水路部，それから市ヶ谷の陸軍参謀本部に行きました．…
（略）
——…現地へ行ってですか．
町田 海図と陸地測量部の地形図を使いました．そこの場所に何個師団の兵隊さんを何日間養うことができるかも考えないといけないでしょう．全体の地理的なことも考えましたけど．他に兵用地誌を編纂していました．
（略）
—— 参謀のほうに手伝いに行かれた期間はどれくらいですか．
町田 海軍と陸軍と併せて二年くらいでしょうかね．…

町田は海軍と参謀本部第二部に所属していたのではなかろうか．第二部の何課かは確定できない．

5）有末武夫（1919- ）

本書（正井・竹内 1999：325）において次のような対談がなされている．

—— 勤労動員はどちらに．
有末 地理の専門ということで参謀本部へ遣られたんです．参謀本部に兵用地理科というのがありました．…その頃はもう国内で戦争をすることが前提になっていて，それで吹上浜・薩摩半島・大隅半島などの海岸の兵用地理を書かされました．
—— 参謀本部の陸地測量部ですか．
有末 まったく別の第二部の兵用地理科というところです．…

有末は 1944 年 4 月以降，勤労動員されている．有末の述べている参謀本部第二部の「兵用地理科」が当時の第五課または第七課の兵要地誌（班）あるいはその他の組織かは判断できない．

人類学・民族学等の分野で活躍されている国分直一（1908－ ）の略年譜によると，彼は台湾において台北師範学校本科教授として任用され，1945 年 3 月 20 日，

警備召集の令状を受け，“［1945 年］七月から八月のはじめにかけて兵要地誌の作成を部隊長から命ぜられる．身分は二等兵であったが，民族学的知識を利用しようとしたものであろう．”（国分直一博士古希記念論集編纂委員会 1980：776 ）と記されている．国分は現地部隊において兵要地誌を作成したケースである．前述の他に多数の研究者が兵要地誌作成(編纂)作業にかかわったことと想像できる．

Ⅲ　わが国の兵要地誌目録（1926－45 年）

ここに掲載した兵要地誌および関連資料類は，つぎの規則に従って目録に作成された．

1．収録の範囲

1）期間

1926（昭和元）年 1 月から 1945（昭和 20）年 8 月までに刊行（調製）されたものに限った．

2）対象とした資料

原則として，中国（旧・満洲を含む）・蒙古を記述対象地域にしている兵要地誌および関連資料類で日本語によって記されたものとした．

3）所在調査の範囲

所在調査の範囲は，駒沢大学図書館，防衛研究所図書館，国立国会図書館に限定した．

2．記述法

本目録は，兵要地誌および関連資料類をタイトルの読みの五十音順に排列した．なお，排列上の地名の読み方は，中国語読みが一般化しているものを除き日本語読みに従った．

1）書誌的事項の記載順序は，タイトル，責任表示，出版地，出版者，出版年月（版表示），頁（丁）数，大きさ，シリーズ名，所蔵機関名，対象地域，表表紙上に記された機密度に関する語句の順に記入した．

構成は次の通りである（／：改行）．

文献番号（以下，No.と略す）　タイトル　責任表示／出版地　出版者　出版年月日（版表示）／頁（丁）数　；　大きさ　（シリーズ名）／<所蔵機関>　対象地域　（機密度に関する語句）／注記／内容

2）タイトルは，原則として標題紙（表表紙）によって記載した．

3）頁数の記入法は，ノンブルのある場合にはそれに従い，第何頁（丁）から第何頁（丁）までを示す．序文等でノンブルのない場合にはその総頁（丁）数を記した．独立した附図・附表は，できる限り記録した．

4）所蔵機関名の略称は次の通りである．駒沢大学図書館は駒大図，防衛研究所図書館は防衛図，国立国会図書館は国会図とする．

5）対象地域は北支那，中支那，南支那，満洲・蒙古，その他に五分類する．なお，北支那は河北省，山東省，河南省，山西省，陝西省，甘粛省．中支那は江蘇省，安徽省，江西省，湖北省，湖南省，四川省．南支那は浙江省，福建省，広東省，広西省，貴州省，雲南省．その他の項は新疆省，青海省，西康省，一部旧ソビエット社会主義共和国連邦および二対象地域以上に重なる場合に使用する．

6）機密度（重要度）について．刊行機関は、軍ないし軍関連機関の秘密保持のために資料の機密度を対象文献に表記している場合もある．そのため，表表紙に「軍事秘密」等の記載がみられるケースもみられる．それらの記載事項を記す．

7）その他．

（1）使用漢字は，原則として本誌の執筆要領に従い，“現行の日本語”を使用した．

（2）［ ］記号は筆者が必要と思われる語・数を補記した場合に使用した．（ ）記号は説明，その他付加的に記す場合に使用した．

（3）文献の内容を知るために，必要と思われた目次等は，（内容）の項に記した．

（4）目録中の注は，当該箇所の右肩に「注」と付して番号を記入し，各文献の書誌的事項の終わりに解説した．

（5）No.の右肩に「＊」を付してある資料は，Ⅳにおいて書誌的注解を行っている．

No. 1．胃石患者の多発に就て[注1]　包頭陸軍病院厚和分院(陸軍軍医少佐 堀江信吉，陸軍軍医中尉 三邊 謙)[注2]　[出版地不明．以下，n.p.と略す]　[出版者不明．以下，s.n.と略す]　[194-]

1 冊 ； 26cm.（蒙古兵用(ママ)衛生地誌調査第 2 報）

<防衛図>　満洲・蒙古

謄写版（手書き）

写真を随所に貼付.

注1．見返し（きき紙）に「満豪史料経歴書」を貼付.「満豪史料経歴書」には本文献が満豪資料（(故）磐井文雄氏と松崎 陽氏の旧蔵資料で，昭和36［1961］年2月6日、防衛庁防衛研修所戦史室（現 防衛研究所図書室）に寄贈された資料）のひとつである旨が記されている.

注2．堀江，三邊両名は緒言による.

No.2.* 陰山山脈北方地区兵要衛生［調査報告］[注1][注2]

（陸軍軍医大尉）村上武夫

[n.p.] [s.n.] 1939.9

［序］［半］丁 概況［半］丁 目次［1］丁 ［本文］第1丁（オ）—第28丁（ウ） ［図表］[18]枚 ; 28cm

<防衛図> 満洲・蒙古

謄写版（手書き）

注1．内題(序)には「調査報告」が付されている.

注2． 見返し（きき紙）に「満豪史料経歴書」を貼付.

No. 3.* 烏蘭察布盟事情[注1] 包頭陸軍病院厚和分院

[n.p.] [s.n.] [1940][注2]

目次［3］頁 序［2］ ［口絵解説］［1］頁 ［口絵］［1］頁 ［本文］第1頁—第68頁 ; 26cm.（蒙古兵用[ママ]衛生地誌調査第1報）

<防衛図> 満洲・蒙古 （「秘」）

謄写版（手書き）

写真を随所に貼付.

(内容)目次[注3]

序

第一章 旅行巡路概要

第二章 烏蘭察布盟の地勢

地形 道路 河川 湖沼 井水

第三章 烏蘭察布盟の気候

気温 雨雪 湿度

第四章 交通

馬 牛 駱駝[ママ]［駝］ 羊

第五章 人情風俗

衣服其他 人情 食滋と栄養 包

第六章 旅行地区疾病分布状態

第七章多発疾患の原因関係

性病 ロイマチスムス 歯牙疾患 皮膚病 トラコーマ 栄養不良 伝染病疾患の存否

第八章 獣病と人体関係 羊蝿と眼蝿疽症

第九章 人口問題

第十章 利用し得べき物資

自然の草木 有用物資 薪炭 獣肉 米穀

第十一章 交易に就て

第十二章 将来戦と烏盟

注1． 見返し（きき紙）に「満豪史料経歴書」を貼付.

注2．本文中にみられた「皇紀二千六百年夏 蒙古草原にて」（口絵裏）の語句から推定する.

注3．各節の記載については，節見出し語のみを列挙する．以下，同様.

No.4.* 運城案内 牛島部隊本部編

[n.p.] [s.n.] 1938.12

悠久［の語］［1］頁 序［1］頁 [口絵]［1］頁 [献辞]［2］頁 目次［4］頁 [本文]第1頁—第50頁 ; 26cm

<防衛図> 北支那

謄写版（手書き）

No.5.* 雲南省兵要地誌概説[注1] 大本営陸軍部

[東京] 大本営陸軍部 1940.7.20.

目次第1頁—第8頁 [本文]第1頁—61頁 附図［11］図 附表［6］枚 ; 22cm

<駒大図><防衛図><国会図> 南支那 （「軍事秘密」の印刷上に白紙片を貼付し，抹消している.）

(内容)目次[注2]

第一章 用兵的観察

第二章 地勢ノ概要

第三章 河川，湖沼，湿地

第四章 主要自動車道

第五章 鉄道

第六章 水運

第七章 通信

第八章 航空

第九章 気象，衛生

第十章 主要都市

第十一章 土着種族

第十二章 宿営，給養

第十三章 度量衡

附図目次

附表目次

注1．防衛研究所図書館所蔵本の表表紙には「一復史料」の捺印がある（見返し（きき紙）に「史料経歴書A」（筆者命名）あり).「一復史料」とは陸海軍省の廃止につき，1945年12月1日，設置された第一復員省（1946年6月15日廃止）に移管された史料である.「史料経歴書A」とは1959年4

月1日付で防衛庁防衛研修所戦史室長名にて作成された文書を示し，内容は，“本史料は大東亜戦争終結による陸海軍省廃止（昭和二十［1945］年十一月三十日）後から昭和二十九［1954］年十一月頃迄の間における日本政府側の復員並に残務処理機関において大東亜戦争関連の史実調査に従事した当事者が作成したものの一つであって，昭和三十［1955］年九月一日付，厚生省引揚局発刊の「援発第一〇五〇号，旧陸海軍関係資料の引継依頼について（回答）」なる文書を以て，防衛庁に移管されその保管責任が防衛庁防衛研修所戦史室に指定されたものである．…”と記されている．

注2．節の細目は略す．

No.5-A* 雲南省兵要地誌概説[注1] 参謀本部

[東京] 参謀本部 1943.4.15

緒言［1］頁 目次第1頁—第6頁 ［本文］第1頁—第70頁 挿図［8］図 挿表［5］枚 附図（袋入り）［25］図 ; 21cm

<防衛図3冊> 南支那 （「軍事秘密」）

（内容）目次

第一章 用兵的観察

要旨 作戦路ノ状況

第二章 地形

地形ノ概要 山地 河川・湖沼

第三章 交通，通信

交通ノ概要 道路 鉄道 水運 通信

第四章 気象

第五章 航空

第六章 衛生

人衛生 馬衛生

第七章 宿営及給養

宿営 給養

挿図

挿表

附録

附図

注1．防衛研究所図書館所蔵本（請求記号：支那—兵要地誌—42）の表表紙には「一復史料」の捺印がある（見返し（きき紙）に「史料経歴書B」（筆者命名）あり）．

「史料経歴書B」とは1958年5月付で防衛庁防衛研修所戦史室長名にて作成された文書を示し，内容は，“本史料（あるいは図書）は大東亜戦争終結以前，陸軍または海軍諸機関が保管していたもののひとつであって，第一または第二復員機関が引き続き保管，昭和三十［1955］年九月一日付厚生省引揚援護局発刊の「援発第一0五0号」によって防衛庁に移管，当戦史室の所蔵に帰したものである．…”と記されている．

防衛研究所図書館所蔵本（請求記号：支那—兵要地誌—44）の表表紙には「返還史料」の捺印がある（見返し（きき紙）に「史料経歴書A」あり）．また，“Printed books with maps, “Outline of Military Geography of YUNNAN SHENG,” Army General Headquarters,1943. “Military Secret” .(6 copies) ”を記載した紙片が付されている．

No.5-B.* 雲南省兵要地誌概説「補修資料」[注1] 波集団司令部[注2]

[n.p.] [s.n.] 1943.10

1冊（ノンブルなし） ; 25cm

<防衛図> 南支那 （「極秘」）

謄写版（手書き）

注1．「史料経歴書C」（筆者命名）（本資料名は「史料経歴票」とのみ記されている）が綴じ込まれている．「史料経歴書C」とは1960年6月20日付で防衛庁防衛研修所戦史室長名にて作成された文書を示す．文書には以下のことが記されている．史料は，1945年8月の終戦に伴い第一復員省（局）史実調査部（資料整理部）において作成あるいは収集されたものである．しかし，占領軍の没収を避けるために部長 服部卓四郎（大佐）が自宅等に本史料を保管した．1960年4月30日，服部（大佐）の死亡に伴い遺族の申し出により同年6月，本史料は戦史室に移管された．

注2．「波」は通称号（兵団文字符）であり，波集団は支那派遣軍第23軍を示す．

No.6. 欧亜航空公司飛行時刻表（兵要地誌資料）[注1][注2] 支那駐屯軍司令部

[n.p.] 支那駐屯軍司令部 1936.6.20

［配布先］［1］頁 表1枚 ; 25cm. （支調第65号）

<防衛図> その他

上記資料と下記資料とが合綴されている．

昭和十年秋季実施綏遠省特別調査報告 第五号 新綏長途自動車会社ニ就テ 支那駐屯軍司令部

[n.p.] 支那駐屯軍司令部 1936.6.15

1冊 ; 25cm. （支調第70号）

<防衛図> 満洲・蒙古

注1．表表紙に「南満洲鉄道株式会社東京支社□□□」の捺印あり．

注2．「史料経歴票」を見返し（きき紙）に貼付．「史料経歴票」とは「昭和33年4月米政府返還旧日本軍記録文書等史料経歴票」（防衛庁防衛研修所戦史室）を示す．内容は，表題，整理番号等の記入欄から構成されている．しかし，史料の入手経路（内容は印刷済み）以外は空欄である．なお，入

手経路について，“本資料は大東亜戦争中米軍が直接戦場で 鹵獲し，又は内地進駐後，陸海軍諸機関から押収した記録文書であって，長くワシントン郊外フランコニヤ等の記録保管所に保管されていたが，米国務省に対する日本政府の返還要求に応じ，...”と記されている．

No.7.* 海南島概説 大本営陸軍部
[東京] 大本営陸軍部 1944.12.8
緒言［1］頁 目次第1頁—第2頁 ［本文］第1頁—第28頁 附表［1］枚（海南島ノ鉄鉱概況表） 附図（袋入り）［1］枚（海南島近傍兵要地誌図 五十万分ノ一） ; 21cm
<防衛図> 南支那 (「軍事秘密」)

No.8.* 河南省兵要地誌概説[注1] 参謀本部
[東京] 参謀本部 1938.6.16
目次第1頁—第4頁 ［本文］第1頁—第48頁 附表［6］枚 附図［21］枚 ［写真集］第1頁—第20頁 ; 22cm
<駒大図><防衛図5冊> 北支那 (「軍事秘密」)
（内容）目次
第一章 用兵的観察
第二章 地形
　地形ノ概要 山地・平地 道路 河川 湖沼・湿地 森林 家屋
第三章 交通
　鉄道 地方運搬材料 水運 航空
第四章 通信
　電信 電話 郵便
第五章 気象
第六章 衛生
第七章 宿営，給養
　概要 宿営 給養 主要都市 金融 度量衡
附表
附図
注1．防衛研究所図書館所蔵本（請求記号：支那—兵要地誌—3および同4）の表表紙には「一復史料」の捺印がある（見返し（きき紙）に「史料経歴書A」あり）．

No.8-A.* 河南省兵要地誌概説 大本営陸軍部
［東京］ 大本営陸軍部 1944.2.4
緒言［1頁］ 目次第1頁—第4頁 ［本文］第1頁—第53頁 附録 附表(袋入り)［3］枚 附図(袋入り)［12］図 ; 21cm
<防衛図> 北支那 (「軍事秘密」)

No.9.* 広西省兵要地誌概説[注1] 大本営陸軍部
［東京］ 大本営陸軍部 1944.2.1
緒言［1］頁 目次第1頁—第3頁 ［本文］第1頁—第40頁 附録第1頁—第17頁 附表［13］枚 附図［2］図 附図（袋入り）［25］図 ; 21cm
<駒大図><防衛図2冊> 南支那 (「軍事秘密」)
注1．防衛研究所図書館所蔵本の内一冊（請求記号：支那—兵要地誌—39）の表表紙には「返還史料」の捺印がある（見返し（きき紙）に「史料経歴票」あり）．また，“Printed books with maps,...,1944. “Military Secret”.(9 copies)”を記載した紙片が付してある．

No.10.* 贛湘地方（江西省 湖南省）兵要地誌概説[注1]
参謀本部
[東京] 参謀本部 1938.7.10
目次第1頁—第7頁 ［本文］第1頁—第37頁 附表［3］枚 附図［15］図[注2]; 22cm
<駒大図><防衛図3冊> 中支那 (「軍事秘密」)
注1．防衛研究所図書館所蔵本の内二冊（請求記号：支那—兵要地誌—13および同14）の表表紙には「一復史料」の捺印がある（各々の見返し（きき紙）に「史料経歴書A」あり）．
注2．表表紙に“附図 拾七枚”と記されているが，正しくは上記の通り15図である．

No.11.甘粛省事情[注1] 参謀本部
[東京] 参謀本部 1943.11.4
緒言［1］頁 目次第1頁—第7頁 ［本文］第1頁—第62頁 附表［5］枚 附図［28］図 ; 23cm
<駒大図><防衛図> 北支那
（内容）目次
第一章 概説
第二章 地形及地質
　地勢 山地及平地 河川 地質 森林 灌漑
第三章 交通
　要旨 鉄道 自動車 地方運搬材料 水運
第四章 航空及通信
　航空 通信
第五章 気象
第六章 衛生
　人衛生 家畜衛生 給水
第七章 資源及経済
　要旨 資源 工業 経済
第八章 主要都市

第九章 民族，宗教及教育
民族 宗教 教育
第十章 行政
要旨 行政 司法
附表
附図
注1．防衛研究所図書館所蔵本の表表紙には「一復史料」の捺印がある（見返し（きき紙）に「史料経歴書A」あり）．

No.12. 間島の概況[注1] 陸軍省調査班
［東京］ ［陸軍省調査班］ 1932.3.1
目次第1頁—第2頁 ［本文］第1頁—第21頁 附表［1］枚 ； 18cm
<国会図> 満洲・蒙古
注1．本資料は国立国会図書館所蔵のものであり，『満洲事変の邦人私的発展に及したる影響に就て』他と合綴されている．

No.13.* 広東省兵要地誌概説[注1] 参謀本部
［東京］ 参謀本部 1937.11.30
目次第1頁—第8頁 ［本文］第1頁—第38頁 附図［19］図 附表［13］枚 ； 22cm
<防衛図4冊> 南支那 （「軍事秘密」）
注1．防衛研究所図書館所蔵本の内，2冊（請求記号：支那—兵要地誌—7および12）の表表紙には「一復史料」の捺印がある（見返し（きき紙）に「史料経歴書B」貼付）．

No.13-A.* 広東省兵要地誌概説[注1] 参謀本部
［東京］ 参謀本部 1938.9.30. （第3版）
目次第1頁—第8頁 ［本文］第1頁—第38頁 附図［19］図 附表［13］枚 ； 22cm
<駒大図><防衛図4冊> 南支那 （「軍事秘密」）
注1．防衛研究所図書館所蔵本の内，2冊（請求記号：支那—兵要地誌—6および8）の表表紙には「一復史料」の捺印がある（見返し（きき紙）に「史料経歴書B」貼付）．

No.13-B.* 広東省兵要地誌概説[注1] 大本営陸軍部
［東京］ 大本営陸軍部 1944.2.1
緒言第1頁—第3頁 目次第1頁—第4頁 ［本文］第1頁—第74頁 附図(袋入り)［12］図
<駒大図><防衛図2冊> 南支那 （「軍事秘密」）
（内容）目次[注2]
第一章 用兵的観察
第二章 地形及地質
第三章 気象
第四章 交通，通信及航空
第五章 衛生
第六章 宿営及給養
第七章 住民地及住民
第八章 産業
附録（翁英作戦ニ於ケル兵要地理的体験事項）
附図
注1．防衛研究所図書館所蔵本の内1冊（請求記号：支那—兵要地誌—40）の表表紙には「一復史料」の捺印がある（見返し（きき紙）に「史料経歴書B」あり）．
注2．節の細目は略す．

No.14.* 外蒙古兵要衛生誌 ［陸軍省］[注1]
［東京］ 陸軍省 1942.5
目次第1頁—第3頁 ［本文］第1頁—第100頁 附図［4］図 ； 18cm
<防衛図> 満洲・蒙古 （「部外秘」）
（内容）目次
第一章 地理的概況
位置及面積 地勢
第二章 気象
要旨 気温 雨及湿度
第三章 交通
陸運 水運 空運
第四省 人口及住民
人口及密度 住民 習俗
第五章 行政機構
沿革 行政区画 行政組織
第六章 衛生，医事
衛生行政 医師及其ノ他ノ医療従事者 医育並ニ教育機関 医療施設 保健衛生施設
第七章 疾病ノ概況
第八章 衛生材料
第九章 有害動物
第十章 給水
第十一章 宿営
第十二章 食料品ノ概況
要旨 農産 畜産 水産
第十三章 主要都市概況
東部地区 中部地区 西部地区
注1．責任表示は記載されていないが，印刷者から推測する．

No. 15.* 貴州省兵要地誌概説 参謀本部
[東京] 参謀本部 1943.4.15
緒言［1］頁 目次第1頁—第6頁 ［本文］第1頁—第39頁 挿図[5]図 挿表[6]枚 附録第1頁—第7頁 附図（袋入り）[13] 図 ; 21cm
<防衛図> 南支那 (「軍事秘密」)
（内容）目次[注1]
第一章 用兵的観察
貴州省ノ価値 作戦路ノ状況
第二章 地形
地形ノ概要 地質 山地 河川
第三章 交通，通信
交通ノ概要 自動車道 鉄道（未設） 水運 交通機関 通信
第四章 航空
第五章 気象
第六章 衛生
人衛生 馬衛生
第七章 宿営及給養
人口密度 住民地 宿営地 現物物資ノ概況
挿図
挿表
附録
附図
注1．節の細目（款）は略す．

No.16.* 北満洲東部（吉林省 延吉道依蘭道）兵要地誌概説 参謀本部
[東京] 参謀本部 1929.5
緒言［1］頁 目次第1頁—第17頁 ［本文］第1頁—第402頁 ［附表］［8］枚 ［附図］［18］; 22cm（北満洲兵要地誌細論 (其三))
<国会図> 満洲・蒙古 (「秘」を抹消して「軍事秘密」を捺印)

No.17.* 極東「ソ」領河川攻撃並工作ニ関スル地誌的参考資料 其ノ一 「アムール」河系[注1] 石井部隊兵要地誌班[注2]
[n.p.] [s.n.] 1939.5.21
［本文］第1丁（オ）—第9丁（ウ） ［附表］; 26cm
<防衛図> 満洲・蒙古 (「秘」)
謄写版（手書き）
注1．外表表紙裏に「満豪史料経歴書」が貼付されている．
注2．軍医 石井四郎（1892·1955）の部隊であると思われる．石井は，1933年から細菌兵器の研究を行い，関東軍防疫給水部（秘匿名は満洲七三一部隊・1941年，ハルビン郊外 平房に本部新設）で中国人，朝鮮人，モンゴル人等を使って日本軍による人体実験を行った．戦後，実行者達は，そのデータを米軍に提供することにより戦犯免責になった．なお，本稿の目録中No.17以外で，石井部隊はNo.18,19（合綴資料）,36,54の著者である．また，Ⅰの4の3）も同部隊の著作である．

No.18.* 極東「ソ」領兵要衛生地誌草案 西部地区[注1] 石井部隊兵要地誌班
[n.p.] [s.n.] 1939.5.
［序］［半］丁 ［本文］第2丁（オ）—第34丁（オ） ; 26cm
<防衛図> 満洲・蒙古 (「秘」)
謄写版（手書き）
注1．外表表紙裏に「満豪史料経歴書」が貼付されている．

No.19. 極東「ソ」領北部地区作戦ニ対スル地誌的並同衛生的着眼事項[注1] 石井部隊兵要地誌班
[n.p.] [s.n.] 1939.5.
［本文］第1丁（オ）—第3丁（ウ） ; 25cm
<防衛図> 満洲・蒙古 (「秘」)
謄写版（手書き）
注1．外表表紙裏に「満豪史料経歴書」が貼付されている．
本資料は上記文献と下記文献の合綴されたものである．
極東「ソ」領東部地区作戦ニ対スル地誌的並同衛生的着眼事項 石井部隊
[n.p.] [s.n.] 1939.4.21.
［本文］第1丁（オ）—第5丁（ウ） ; 25cm
<防衛図> 満洲・蒙古 (「秘」)
謄写版（手書き）

No.20.* 九月以降ニ於ケル黄河氾濫ノ変化ニ就テ（兵要地誌資料） 北支那方面軍司令部
[n.p.] [s.n.] 1938.10.25..
配布先［半］丁 ［本文］第1丁（オ）—第3丁（ウ） ［附図］［2］図 ; 25cm (方軍地資第38号)
<防衛図> 北支那 (「秘」)

No.21.* 黄河氾濫関係資料綴[注1]

本資料綴は4文献を合綴している．各々について書誌的事項を記す．

i）黄河氾濫其後ノ変化ニ就テ（兵要地誌資料） 北支那方面軍司令部

[n.p.] [s.n.] 1938.9.25

1冊 ; 26cm （方軍地資第33号）

<防衛図> 北支那 （「秘」）

ii）黄河氾濫対策ニ関スル研究 甲集団参謀部第二課[注2]

[n.p.] [s.n.] 1938.9.27

1冊 ; 26cm （方軍地資第34号）

<防衛図> 北支那 （「極秘」）

iii）九月以降ニ於ケル黄河氾濫ノ変化ニ就テ（兵要地誌資料）

No.20と同じ

<防衛図> 北支那 （「秘」）

iv）黄河決潰口偵察報告(主トシテ三劉砦) 杉山部隊参謀部第二課

[n.p.] [s.n.] 1939.2.10

1冊 ; 26cm （方軍地資第5号）

<防衛図> 北支那

注1．このタイトルは外表表紙による．外表表紙裏に「原本史料経歴票」が貼付されている．「原本史料経歴票」は，防衛庁防衛研修所戦史室で作成されたものである．その内容は，表題，戦史室が入手した経緯，史料批判上参考となる事項（史料作成，記述，口述者の当時または史料内容当時の官職氏名等），表題以外の参考事項，その他の記入欄から構成されている表である．

注2．甲集団は北支那方面軍の称号．

No.22．黄河兵要地誌概説[注1] 参謀本部

[東京] 参謀本部 1937.10.15

緒言第1頁 目次第1頁—第4頁 [本文] 第1頁—第38頁 附図 [6] 図 附録附図 [8] 図 ; 22cm

<駒大図><防衛図6冊> 北支那 （「軍事秘密」）

注1．防衛研究所図書館所蔵本の内4冊（請求記号：支那—兵要地誌—23,24,67,68）の表表紙には「一復史料」の捺印がある（見返し（きき紙）に「史料経歴書A」あり）．

No.23.* 江西省兵要地誌概説(改正増補—交通，物資) 漢口軍連絡部

[n.p.] [s.n.] 1943.7.10

[記] 第1頁 目次第2頁 [本文] 第3丁（オ）—第106丁（ウ）・[9丁半] ; 25cm．（漢連情資第35号）

<防衛図> 中支那 （「極秘」）

No.23-A.* 江西省兵要地誌概説[注1] 大本営陸軍部

[東京] 大本営陸軍部 1943.12.8

緒言第1頁—第3頁 目次第1頁—第4頁 [本文（含挿図・挿表）] 第1頁—第59頁 附録第61頁—第76頁 附図（袋入り）[28] 枚 ; 15cm

<駒大図><防衛図2冊> 中支那 （「軍事秘密」）

（内容）目次[注2]

第一章 用兵的観察

要旨 主要作戦路 編制装備

第二章 地形及地質

第三章 気象

第四章 航空

第五章 交通

道路 鉄道 水運

第六章 通信

第七章 衛生

第八章 宿営及給養

第九章 住民地及住民

住民地 住民

附録（江西省主要作戦ニ於ケル兵要地誌的体験）

附図

注1．防衛研究所図書館所蔵本の内，1冊（請求記号：支那—兵要地誌—47）の表表紙には「返還史料」の捺印がある（見返し（きき紙）に「史料経歴書A」あり）．また，"Printed books with maps,..., 1943. "Military Secret". (8 copies) "を記載した紙片が付してある．

注2．節の細目（款）は略す．

No.24.* 湖南省兵要地誌概説[注1] 参謀本部

[東京] 参謀本部 1943.8.25

緒言第1頁—第2頁 目次第1頁—第4頁 [本文] 第1頁—第44頁 附録（第一次長沙作戦行動地域兵要写真集） 附図（袋入り）[14] 図 ; 21cm

<駒大図><防衛図2冊> 中支那 （「軍事秘密」）

注1．防衛研究所図書館所蔵本の内1冊（請求記号：支那—兵要地誌—37）の表表紙には「返還史料」の捺印がある（見返し（きき紙）に「史料経歴票」あり）．また，"Printed books with maps,...,1943. "Military Secret".(6 copies) "を記載した紙片が付してある．

No.25.湖北省兵要地誌概説 参謀本部

[東京] 参謀本部 1938.9.10

目次第1頁—第7頁 ［本文］第1頁—第 63 頁 写真［14］頁（23 葉） 附図［8］図 ; 22cm
<駒大図><防衛図2冊> 中支那 （「軍事秘密」）
（内容）目次[注1]
第一章 用兵的観察
第二章 地形一般ノ概況
山地及平地 道路 河川・湖沼及湿地 軍事施設 主要都市
第三章 宿営，給養
第四章 森林
第五章 輸送力
陸上輸送 水運 航空路
第六章 通信
電信 電話
第七章 気象，衛生
気象 衛生
附録第一 湖北省民ノ特性
注1.節の細目（款）は略す.

No.26.* 山西省東南部兵要地誌概況[注1] 杉山部隊本部
[n.p.] [s.n.] 1939.5.20
配布区分［半］丁 目次［1丁半］ [本文]第1丁（オ）—第24丁（ウ） 附図［9］図 ; 26cm.（方軍地資第20号）
<防衛図> 北支那 （「極秘」）
注1．表表紙に李王 垠（1897-1970）の花押あり.

No.27.* 山東省兵要地誌概説[注1] 参謀本部
[東京] 参謀本部 1937.3.31
序第1頁 目次第1頁 ［本文］第1頁—第19頁 ; 22cm <防衛図4冊> 北支那 （「秘規則適用」）
注1．防衛研究所図書館所蔵本の内，3冊（請求記号：支那—兵要地誌—20,89,127）の表表紙には「一復史料」の捺印がある（見返し（きき紙）に「史料経歴書A」あり).

No.27-A.* 山東省兵要地誌概説[注1] 参謀本部
[東京] 参謀本部 1937.3.31
目次第1頁 ［本文］第1頁—第12頁 ; 23cm
<駒大図> 北支那 （「秘」）
注1．本資料は折り本形態である.

No.28.* 山東省北部（高苑，蒲台附近）兵要地誌概説[注1] 甲集団参謀部
[n.p.] [s.n.] [1942.7.20]
配布先［半］丁 目次［2］丁 ［本文］第1丁（オ）—第51丁（オ） （附図・附表[注2]） ; 26cm （方軍参二調資第15号）
<防衛図> 北支那 （「極秘」）
謄写版（手書き）
注1．見返し（きき紙）に「史料経歴票」が貼付されている.
注2．本資料は，目次に記載されている附図・附表を欠いている.

No.29.* 四川省兵要地誌概説[注1] 参謀本部
［東京］ 参謀本部 1942.7.8
緒言［1］頁 目次第1頁—第6頁 ［本文］第1頁—第49頁 附図［21］図 附表［20］枚 ; 21cm
<駒大図><防衛図3冊> 南支那 （「軍事秘密」）
注 1．防衛研究所図書館所蔵本の内1冊（請求記号：支那—兵要地誌—50）の表表紙には "Printed books with maps,..., 1942. "Military Secret".(5 copies) " を記載した紙片が付してある．見返し（きき紙）に「史料経歴票」を貼付してある.,

No.30. 上海及南京附近兵要地誌概説 参謀本部
[東京] 参謀本部 1937.8.16
序［1］頁 目次第1頁 ［本文］第1頁—第24頁 附図［2］図[注1] ; 21cm
<駒大図><防衛図> 中支那 （「秘規則適用」を抹消して，「軍事秘密」を捺印）
注1．本文中に折り込み地図1図があるので，この1図を加えて，本書の表表紙には "附図参枚" と記載してある.

No.31.* 青海省事情 参謀本部
[東京] 参謀本部 1943.11
緒言［1］頁 目次第1頁— 第3頁 ［本文］第1頁—第24頁 附図（袋入り）［9］図 ; 21cm
<防衛図> その他 （「秘」）
（内容）目次
第一章 総説
第二章 地勢
要旨 山地 河川湖沼 柴達木盆地
第三章 交通
要旨 陸運 水運
第四章 航空及通信
第五章 気象

第六章 衛生
人衛生 獣衛生 給水
第七章 主要都市
第八章 資源
第九章 統治資料
住民 教育及文化 行政 経済
附図

No.32. * 西康省事情 参謀本部
[東京] 参謀本部 1943.6.8
緒言［1］頁 目次第1頁— 第3頁 ［本文］第1頁—第16頁 挿表［4］枚 附表［5］枚 附図（袋入り）［8］図 ; 21cm
<駒大図><防衛図2冊> その他 (「秘」)

No.33. * 西北支那兵要衛生地誌[注1] 大本営陸軍部
［東京］ 大本営陸軍部 1944.3
緒言［1］頁 目次第1頁—第3頁 ［本文］第1頁—第29頁 附図［4］図 ; 21cm
<防衛図> その他 (「部外秘」)
（内容）目次
第一章 概説
第二章 地理的概要
第三章 気象
要旨 各地ノ気象状況
第四章 住民ノ概況
要旨 住民ノ分布 風俗習慣
第五章 衛生及医事
要旨 衛生行政 衛生施設 陝甘寧辺区（中京地区）衛生概況
第六章 疾病ノ概況
要旨 疾病ノ発生状況
第七章 有害動物
第八章 宿営及給養
要旨 地域別宿営及給養状況
第九章 給水
要旨 地域別給水状況
第十章 患者収療ノ参考
附録（西北支那旅行記抜萃）
附図
注1．本文献において示している西北支那の範囲は，陝西省，甘粛省，寧夏省，青海省，新疆省の五省である．

No.34.* 浙江省兵要地誌概説 参謀本部
［東京］ 参謀本部 1929.3
緒言［1］頁［写真］［2］頁 目次第1頁—第22頁［本文］第1頁—第448頁 附表［3］枚[注1]
附図［9］図 ; 21cm
<防衛図><国会図> 南支那 (「秘」を抹消して「軍事秘密」)
（内容）目次[注2]
第一篇 総論
第一章 地勢ノ概要
第二章 作戦上ニ於ケル浙江省ノ価値
第三章 浙江省ノ水路
第四章 浙江省ノ陸路
第五章 浙江省ノ海岸及港湾
第六章 宿営，給養
第七章 気候，風土
第二篇 各論
第一章 地形
第二章 宿営及給養
第三章 輸送力
第四章 通信
第五章 気象，衛生
附録
附表
附図
注1.目次に記載されている"附表第三..."は見当たらなかった．
注2．節以下は略す．

No.35. * 陝西省兵要地誌概説[注1] 参謀本部
[東京] 参謀本部 1938.5.31
目次第1頁—第4頁 ［本文］第1頁—第36頁 附図［9］図 附表［22］枚 ; 22cm
<駒大図><防衛図4冊> 北支那 (「軍事秘密」)
注1．防衛研究所図書館所蔵本の内3冊（請求記号：支那—兵要地誌—17,19,72）の表表紙には「一復史料」の捺印がある（見返し（きき紙）に「史料経歴書A」あり）．

No.35-A.* 陝西省兵要地誌略説[注1] 甲集団参謀部
[n.p.] [s.n.] 1942.6.1
［序］［1］頁 目次［3頁］ ［本文］第1頁—第43頁 ; 26cm（方軍参二調資第9号 ; 作戦資料1輯）
<防衛図> 北支那 (「軍事極秘」)
（内容）目次[注2]

第一，用兵的観察
第二，四安平地ノ特異点
第三，作戦路
第四，河川
第五，天候気象
第六，衛生
第七，編制装備上特ニ考慮スベキ諸件
第八，附録
第九，附図[注3]
注1．見返し（きき紙）に「史料経歴票」が貼付されている．
注2．節以下は略す．
注3．防衛研究所図書館所蔵本中に附図は見当たらない．

No.36.* 対「ソ」作戦上特ニ顧慮スヘキ主要戦疫ニ関スル地誌学的観察[注1] 石井部隊
[n.p.] [s.n.] 1939.6.10
［序］［半］丁 目次［1］丁 ［本文］第1丁（オ）—第30丁（ウ） 附録 ; 26cm
<防衛図> 満洲・蒙古 (「秘」)
謄写版（手書き）
注1．見返し（きき紙）に「満豪史料経歴書」を貼付．

No.37. 中支那兵要獣医衛生誌[注1] 参謀本部
[東京] 参謀本部 1941.2.20
目次第1頁—第24頁 ［本文］第1頁—第545頁 附図［4］図 ［附表］[20] 枚 ; 21cm
<防衛図> その他[注2] (「軍事秘密」)
（内容）目次[注3]
第一章 中支那ノ地域，面積並ニ人口
第二章 中支那ニ於ケル地形ノ概要
第三章 中支那ノ気象
第四章 支那ニ於ケル馬史
第五章 支那馬
第六章 驢及騾
第七章 牛
第八章 羊豚及家禽
第九章 中支那ニ於ケル地方獣疫並ニ其ノ防疫
第十章 中支那派遣軍発生病馬ニ関スル諸統計
第十一章 中支那陸軍獣医関係法規
第十二章 中支那ニ於ケル馬糧
第十三章 中支那ニ於ケル飲馬水及燃料
第十四章 中支那ニ於ケル製塩業
第十五章 中支那ニ於ケル獣医資材
第十六章 中支那ニ於ケル人畜共通ノ疾病
第十七章 中支那ニ於ケル食肉衛生
第十八章 中支那ニ於ケル畜産加工業
第十九章 中支那ニ於ケル有害（毒）動植物
注1．見返し（きき紙）に「史料経歴書B」を貼付してある．
注2．本資料における中支那の範囲は，筆者の対象地域区分(III の2.5)）に貴州省，河南省を加えた九省を示している．
注3．節以下を略す．

No.37-A. 中支那兵要獣医衛生誌別冊[注1] 参謀本部
[東京] 参謀本部 1941.2.20
目次［3］頁 附図［39］図 ; 21cm
<防衛図> その他 (「軍事秘密」)
注1．見返し（きき紙）に「史料経歴書B」を貼付してある．

No.38. 中支・南支兵要地誌資料[注1] 第十一軍参謀部
本資料は8種（内，1点は図のみ）の文献・図を合綴したものである．各々について書誌的事項を記す．
i）税警旅南昌東北地区現有工事図 斎藤部隊報告（呂集団参謀部複写[注2]）
[n.p.] [s.n.] [1938.9.4]
7図 ; 26cm
<防衛図> その他
出所：敵将校ノ遺棄屍体ヨリ押収
ii）俘虜訊問ノ結果得タル情報
斎藤部隊報告（呂集団参謀部複写）
[n.p.] [s.n.] 1938.1.6
［本文］［3丁］ ［図］［4］枚 ; 26cm
<防衛図> その他 (「極秘」)
iii）鄱陽湖ノ水路状況 伊集団司令部（呂集団参謀部複写）
[n.p.] [s.n.] 1938.7.27
［参考文献リスト］［半］丁 目次第1丁（オ） ［図］［10］枚 附録（鄱陽湖（自湖口至南昌）航路ニ就テ）第11丁（オ）—第21丁（ウ） ［図］［10］枚 ; 26cm
<防衛図> その他 (「秘」)
複写： 1939.1.31
iv）中支那気象之参考（除航空気象）
陸軍砲工学校気象部調査（呂集団参謀部抜萃複写）
[n.p.] [s.n.] 1939.2
目次［1］丁 ［本文（表のみ）］［8］丁 ［折り込み表］［2］枚 ; 26cm
<防衛図> 中支那 (「秘」)

v）江西省鄱陽湖流域之気象 臨時野戦気象隊（呂集団参謀部複製）
[n.p.] [s.n.] 1939. 1
［本文（表のみ）］［5］丁 ; 26cm
<防衛図> 中支那 (「秘」)
vi）昭和十四年二月及至六月 徳安・南昌日出日没月齢表 高畠部隊（呂集団参謀部複製）
[n.p.] [s.n.] 1939.2
［本文（表を含み）］［2］丁 ［折り込み表］［4］枚 ; 26cm
<防衛図> 中支那 (「秘」)
vii）情報追録 呂集団参謀部
[n.p.] [s.n.] 1939.2
［本文］第1頁—第8頁 ; 26cm
<防衛図> 中支那 (「軍事極秘」)
viii）（兵要地理）
[n.p.] [s.n.] [193—]
［本文］［1］頁 ［図］［2］枚 ; 26cm
<防衛図> 中支那
注1．このタイトルは外表表紙による．
注2．第11軍（支那派遣軍）を示す．

No.39.* 長江下流地方兵要地誌抜萃（江蘇省，安徽省）参謀本部
[東京] 参謀本部 1928.6
目次第1頁—第10頁 ［本文］第1頁—第144頁 附図［8］図 ; 15cm
<駒大図> 中支那 (「秘」)

No.40.直隷省兵要地誌概説 参謀本部
[東京] 参謀本部 1927.3
目次第1頁—第23頁 ［本文］第1頁—第1172頁 附図・附表［多数］ ; 23cm
<国会図> 北支那 (「秘」)

No.41.* 東粤地方（汕頭附近）兵要地誌[注1] 参謀本部
[東京] 参謀本部 1939.5.30
緒言［1］頁 目次第1頁—第9頁 ［本文］第1頁—第135頁 附図［10］図 ; 22cm
<駒大図><防衛図2冊> 南支那 (「軍事秘密」)
注1．防衛研究所図書館所蔵本の内，1冊（請求記号：支那—兵要地誌—75）の表表紙には“Printed books with maps, ..., 1939. “Military Secret”.(9 copies)”を記載した紙片が付してある．見返し（きき紙）に「史料経歴書A」を貼付してある．

No.42. 東部ソ満国境作戦地方兵要地誌 其ノ一—七[注1]
[n.p.] [s.n.] [1933-?][注2]
1冊 ; 28cm
<防衛図> 満洲・蒙古
謄写版（手書き）
注1．このタイトルは外表表紙による．なお，内表紙に「返還史料」の捺印がある．
注2.出版年は外表表紙に鉛筆書きしてあるメモを参考に推定する．

No.43. 洮南・昂々渓・札蘭屯西方地区兵要地誌資料[注1]
[n.p.] [s.n.] [1928-][注2]
目次［1］丁 ［本文］第1丁（オ）—第35丁（オ） 附録第1丁（オ）—第10丁（オ） 附第10丁（オ） —第14丁（オ） 附表［8］枚 ; 27cm
<防衛図> 満洲・蒙古
謄写版（手書き）
注1．表表紙には「返還史料」の捺印がある（見返し（きき紙）に「史料経歴票」あり）．また，“本書ハ中村□太郎少佐の報告？ならん 田口”のペン書きメモあり．
注2．出版年は，附表第一に“民国十七年八月...”と記されている点を参考にして推定する．

No.44.* 内蒙古西蘇尼特附近兵要衛生蒙古人生活状態調査資料[注1] 駐蒙軍軍医部
[n.p.] [s.n.] 1939.8
［序］［半］丁 目次［1丁半］ ［本文］第1丁（オ）—第167丁（ウ） ; 26cm
<防衛図> 満洲・蒙古 (「軍事秘密」)
写真を随所に貼付．
（内容）目次[注2]
緒言
総論
第一章 地文
第二章 人文
第三章 給水
第四章 宿営給與
第五章 衛生
第六章 患者ノ収療
第七章 獣疫生物
第八章 蒙古軍ノ衛生指導

第九章 蒙古人ノ体力検査（附蒙古人ノ体格）
第十章 徳化兵要衛生
第十一章 土木魯台兵要衛生
注1．外表紙裏に「満蒙史料経歴書」が貼付されている．
注2．節以下を略す．

No.45.* 内蒙古具子廟附近兵要衛生蒙古人生活状態調査資料 戊集団軍医部[注1]
[n.p.] [s.n.] 1939.10
［序］［半］丁 配布区分表 目次［2］丁 ［本文］第1丁（オ）—第69丁（オ） 附表［17］枚 ; 27cm.（内蒙古調査資料其3）
<防衛図> 満洲・蒙古 （「軍事秘密」）
目次，本文，附表：謄写版（手書き）
（内容）目次[注2]
第一章 内蒙古具子廟附近ニ於ケル風俗習慣
第二章 蒙古人ノ被服ニ就テ
第三章 具子廟附近ニ於ケル漢商ニ就テ
第四章 蒙古軍（第二十五団）調査
第五章 包及方錐形天幕保温能力検査及燃料試験
第六章 喇嘛医ニ就テ及ヒ之カ対策
第七章 具子廟以北地区ニ於ケル兵要衛生地誌
第八章 内蒙作戦ニ於ケル衛生勤務（設想）殊ニ傷病者収療勤務ニ就テ（附給水勤務）
第九章 燃料ニ就テ 炊爨試験成績
第十章 西蘇尼特——具子廟道路ノ概況
附表
注1．戊集団は駐蒙軍を示す．
注2．節以下を略す．

No.46.* 熱河省兵要地誌 参謀本部
[東京] 参謀本部 1932.3
［正誤表］ 緒言［1］頁 目次第1頁—第15頁 ［本文］第1頁—第163頁 附表［20］枚 附図［41］図 ; 23cm
<国会図> 満洲・蒙古 （「秘」）
（内容）目次
第一編 総論（章名を略す）
第二編 各論（章名のみを列記）
地形 宿営・給養 輸送力 気象・衛生 通信網 作戦上ノ参考資料
附表
附図

No.47. 鄱陽湖周辺敵情兵要地誌綴[注1][注2]
本資料は8種（内，1点は図のみ）の文献・図を合綴したものである．各々について書誌的事項を記す．
i）九江廬山附近南昌（口水）作戦時 清水部隊（呂集団参謀部複写）
[n.p.] [s.n.] [1939?][注3]
7図 ; 26cm
<防衛図> 中支那
ii）俘虜訊問ノ結果得タル情報
No.38. ii）と同じ．
iii）鄱陽湖ノ水路状況 伊集団司令部（呂集団参謀部複写）
No.38. iii）と同じ．
iv）中支那気象之参考（除航空気象）
陸軍工学校気象部調査（呂集団参謀部抜萃複写）
No.38. iv） と同じ．
v）江西省鄱陽湖流域之気象 臨時野戦気象隊（呂集団参謀部複製）
No.38. v） と同じ．
vi）昭和十四年二月及至六月 徳安・南昌日出日没月齢表 高畠部隊（呂集団参謀部複製）
No.38. vi） と同じ．
vii）情報追録 呂集団参謀部
No.38. vii）と同じ．
viii）（兵要地理）
No.38. viii）と同じ．
複製資料
注1．このタイトルは外表表紙による．
注2．内見返し（きき紙）に「複製資料経歴票」が貼付されている．「複製資料経歴票」は，防衛庁防衛研修所戦史室で作成されたものである．その内容は，表題，戦史室が複製した経緯，資料評価上参考となる事項，資料についての所見，その他の記入欄から構成されている表である．
注3．出版年は外表表紙の記載から推定する．

No.48.* 福建省兵要地誌 参謀本部
[東京] 参謀本部 1935.6.26
福建省兵要地誌正誤表 緒言［1］頁 目次第1頁—第21頁 ［本文］第1頁—第282頁 附図［12］図 ; 23cm
<防衛図> 南支那 （「秘規則適用」）

No.49. 平漢沿線兵要地誌概説（第一巻） 参謀本部
[東京] 参謀本部 1937.8
序［1］頁 目次［1］頁 ［本文］第1頁—第20頁 附図［1］図 ; 23cm
<駒大図><防衛図> 北支那 (「軍事秘密」)

No.50.* 平津地方（河北省北部）兵要地誌概説 参謀本部
[東京] 参謀本部 1937.8.20
序［1］頁 目次［1］頁 ［本文］第1頁—第31頁 附図［1］図 ; 23cm
<駒大図><防衛図> 北支那 (「軍事秘密」)

No.51.* 北支の河川運輸と支那の河川 旭組河川運輸部[注1]
天津 三宅冨一 1939.4.15
［本文］第1丁（オ）—第297丁（ウ） ; 26cm
<防衛図2冊> 北支那 (「秘」)
（複製資料）
注1. 防衛研究所図書館所蔵本（請求記号：支那—兵要地誌—83）の見返し（きき紙）には「複製資料経歴票」が貼付されている．防衛研究所図書館所蔵本（請求記号：支那—兵要地誌—84）には「原本史料経歴票」が綴じられている．

No.52.* 北支兵要衛生概要 ［陸軍省］[注1]
[東京] 陸軍省 1937.8
［序］［1］頁 目次第1頁—第10頁 ［本文（附表2枚を含む）］第1頁—第225頁 附図（本文中の附図2図を含む）［4］枚 ; 18cm
<防衛図> その他[注2] (「(取扱注意)」
注1. 責任表示は記載されていないが，印刷者から推測する．
注2.タイトル中では「北支」を記載しているが，本書の対象地域は蒙古の一部も含む．

No.53. 北海南寧附近兵要地誌概説[注1] 参謀本部
[東京] 参謀本部 1939.6.1
目次第1頁—第5頁 ［本文］第1頁—第39頁 挿図[1]図 附表[2]枚 附図［8］図 附録第1第43頁—第45頁 附録附図[7]図 附録第2(図)第46頁 附録第3(写真) 第47頁—第54頁 附録第4第55頁—第61頁 挿図[9]図 ; 23cm
<防衛図2冊> 南支那 (「軍事秘密」)
注1．防衛研究所図書館所蔵本の内，1冊（請求記号：支那—兵要地誌—21）は，目次等が抜けている（落丁本）．

No.54.* 満洲里兵要地誌資料[注1] 石井部隊
[n.p.] [s.n.] 1939.5
［本文］第1丁（オ）—第4丁（ウ） ［附図］［1］枚 ; 26cm
<防衛図> 満洲・蒙古 (「秘」)
謄写版（手書き）
注1．見返し（きき紙）に「満蒙史料経歴書」を貼付．

No.55. 満蒙兵要地誌概説 参謀本部
[東京] 参謀本部 1931.3
満蒙兵要地誌概説正誤表 緒言［1］頁 ［写真］第1頁—第3頁 目次第1頁—第5頁 ［本文］第1頁—第98頁 附図［7］図 附表［3］枚 附録（満洲及東部内蒙古地形一般図 1図 縮尺 1:250万） ; 22cm
<駒大図> 満洲・蒙古 (「秘」)

No.56.* 南支那兵要地誌軍用資源概説 参謀本部
[東京] 参謀本部 1933.10.20
緒言［1］頁 ［写真］［2］頁 目次第1頁—第17頁 ［本文］第1頁—第251頁 ［附表］［2］枚 附図［7］図 挿図［6］図 ; 21cm
<防衛図> 南支那 (「秘規則適用」)
（内容）目次[注1]
第一篇 総論
第二篇 地形ノ概要
第三篇 宿営，給養ノ概要
第四篇 主要都市
第五篇 輸送ノ概要
第六篇 航空
第七篇 要塞
第八篇 気象
第九篇 衛生
第十篇 編成，装備
第十一篇 人文上ノ特性
第十二篇 資源ノ概要
附表，附図
注1．章以下を略す．

No.57.* 洛陽—西安間兵要地誌概説 多田部隊参謀部
[n.p.] [s.n.] 1940.8.31
［配布区分等］［1］頁 目次［1］頁[注1] ［本文］第1

頁—第 11 頁　附表第 12 頁　；　25cm　（方軍調資第 45 号）
<防衛図> 北支那　（「軍事極秘」）
各頁は折り畳形式である．
注 1.目次には附図，写真等の存在が記載されているが，それらは防衛研究所図書館所蔵本には含まれていない．

No.58.*　自隴海鉄道（主トシテ帰徳以東）至揚子江下流（主トシテ南京以東）間兵要地誌概説　参謀本部
［東京］　参謀本部　1937.10.20
目次第 1 頁　［本文］第 1 頁—第 30 頁　附図［10］図［附表］［1］枚　；　23cm
<駒大図><防衛図 3 冊>　その他　（「軍事秘密」）
注 1. 防衛研究所図書館所蔵本の内，2 冊の表表紙には「一復史料」の捺印がある（見返し（きき紙）に「史料経歴書 B」あり）．

Ⅳ 書誌的注解

ここではⅢの No.の右肩に「＊」を付した資料について，対象地域の重要性（兵要地誌的意味），参考資料，調査法を中心に兵要地誌目録の書誌的注解を行った．

No.2.　本書における調査の目的は，“次期作戦準備ノ為師団担任地域内ノ兵要衛生調査ヲ実施スルニ在リ”（概況）と記されている．調査要領は，“将来軍ノ主要作戦路タルヘキ道路附近二粁以内ノ実状ノ見聞並地方諸機関ニ於ケル従来ノ調査事項トヲ相総合参照記載セリ”（概況）と述べられている．

「満豪史料経歴書」には，“この史料は，満豪史料（別冊目録参照）のひとつである．”（筆者下線）と書かれているが，筆者は前記目録を見出すことができなかった．

No.3.　本書の著者は，“私は出来うるだけ常日頃，… 此の一編を作ってみた．”（序）の記述とラスト・ページに捺印されている氏名から陸軍軍医 堀江信吉と考えてよいであろう．

No.4.　本書は，“乾隆二十八年［1763 年］刊刻ニ依ル解州安邑県運城志ヲ参照シ…”（序），かつ，北支事変直前の事実に基づき張金曜他によって記された著作を杉本輜重兵中尉が翻訳したものである．

No.5. 雲南省の兵要地理上の価値について，“支那奥地ニ対スル政治的，経済的進入路トシテ爾他ノ方面ニ比較スベクモアラザルモ主要ナル領域ヲ失ヒ且沿岸ヲ封鎖セラレ纔カニ奥地ニ餘喘ヲ保チツツアル蒋政権ニ対シテハ最モ主要ナル最後的輸血路タリ…又本省ハ四川ニ退避セル蒋政権ノ複廊タリ”（第 1 頁）と記している．日本軍は，この地域を蒋介石政権との関連上，重要とみなした．

No.5-A.　本書は，No.5 の“増補改訂セルモノ”（緒言）である．本書作成のための参考資料として，『西南援蒋路概説』（1942 年 3 月，参謀本部調製），『雲南省兵要地誌概説』（1942 年 9 月，印度支那防衛司令部調製）他をあげている（緒言）．

No.5-B.　本書の作成経緯について，“本補修資料ハ昭和十八［1943］年四月参謀本部調製雲南省兵要地誌概説ヲ基礎トシ… ”（緒言）と記している．この記述から本書は No.5-A を基礎にしていることがわかる．参考資料として，『雲南省気象概況』（1943 年 4 月，北部警備司令部調製），『支那省別全誌（雲南省）』（1942 年 8 月 15 日）他 6 点をあげている（緒言）．

No.5-A の第三章 の道路，通信，第四章 航空を主に補修している．

No.7.　本書の作成経緯について，“本書ハ最近軍司令部ヨリ入手セル資料及既往ノ現地軍提出諸資料等ニ基キ主トシテ兵要地誌的見地ヨリ海南島ノ概況ニ関シ説明セルモノナリ ”（緒言）と述べている．本島の兵要地理上の価値について，“南支那海方面ヨリスル香港方面及支那大陸進攻ノ拠点ヲ形成スルト共ニ仏印ノ政戦略的動向決定ニ大ナル影響ヲ与フルニ恰適ナル地理的位置ヲ占メルハ注目ヲ要ス”（第 1 頁）と記ている．戦争遂行上，本島は重要資源である鉄鉱の産出地としての価値をも有している．

No.8.　本書の成立経緯について，“本書ハ大正九［1920］年調製河南省兵要地誌ヲ基礎トシ新資料ニ依リ若干ノ修正ヲ加エタルモノナリ”（見返し（きき紙））と記している．河南省の兵要地理上の価値について，本省を貫流する黄河は一大障碍であり，山東方面からの攻勢および防勢作戦上，側面掩護の作用をする．また，河南方面の作戦上，兵站補給路として利用できるとしている（第 1 頁）．

No.8-A. 本書は，No.8 を主として『河南省兵要地誌概説』（1943 年 8 月，甲集団参謀部調製），『予南作戦地域兵要地誌資料 』（1941 年 6 月，呂集団参謀部調製）に基づき増補改訂したものである（緒言）．

No.9.　本書作成のための参考資料として，『広西省

兵要地誌概説』(1943年11月,南方軍総司令部調製),『広西省兵要地誌概説』(1942年9月,北部仏印警備司令部調製)その他を列記する(緒言).

本書は,広西省の兵要地理上の価値について,“南支那防衛ノ要域ヲ成ス”(第1頁)とし,“緬甸「ルート」ト相並ンデ仏印方面ヨリスル重要援蒋路ヲ形成”(第1頁)する地域でもあるとしている.

No.10. 贛湘地方の兵要地理上の価値について,“本地方ハ政治的,軍事的ニ意義大ナルノミナラス経済的ニモ極メテ重要ナル位置ヲ占ム即チ本地方ハ各地物資集散地トシテノミナラス…産米量最モ豊富ナルノミナラス…特殊鉱物ハ列強ノ垂涎措力サル所ノモノナリトス”(第2頁)と記されている.

No.13. 本省の兵要地理上の価値について,“広東省ハ支那ノ南方門戸タル香港及広東等ヲ擁シ連結成レル粤漢[筆者注:粤は広東省の旧省名.粤漢鉄道は広東―武昌間.ただし,未設部分あり.]及広九鉄道[筆者注:本線は広東―九龍間.]ニ依リ尠クモ長江以南ヲ傘下ニ収ムルノ態勢ニ在リ”(第1頁)と述べている.

No.13-A. 本書の内容はNo.13と同じ.

No.13-B. 本書はNo.13の増補改訂版である.本書編纂のための参考資料として,『北海南寧附近兵要地誌概説』(1939年6月,参謀本部調製),『南支方面五十万分ノ一兵要誌図』(1943年6月,支那派遣軍総司令部調製)『南方支那自動車道路網図』(1942年9月,波集団司令部調製)他17点の兵要地誌・地図および関係資料があげられている(緒言).

No.14. 本書の成立経緯について,“本誌ハ関東軍ノ調査報告及其ノ他ノ文献資料ヨリ編纂セルモノナリ”(見返し(きき紙))と記している.

No.15. 本書の成立経緯についてみると,“本書ハ主トシテ左記資料ニ基キ大正五[1916]年当部調製貴州事情ヲ改訂編纂セルモノナリ”(緒言)と記され,『貴州事情』(筆者未見)が底本となっていることがわかる.なお,編纂のための参考資料として,『貴州省兵要地誌概説資料』(1942年7月,支那派遣軍総司令部調製),『貴州省兵要地誌概説(補修編)』(1942年7月,波集団司令部調製),その他 現地軍提供資料があげられている(緒言).

本省の兵要地理上の価値について,“[支那]事変後重慶政権ノ頓ニ重視スル所トナリ南京,武漢方面ヨリ軍需工場及軍事教育機関等ノ一部ノ移転若クハ新設ヲ見タルノミナラズ特ニ蒋政権西遷以後ハ交通建設大イニ促進セラレ…西南援蒋路ノ骨幹ヲ構成スルニ至レリ”(第1頁―第2頁)と記している.

No.16. 本書は,『北満洲兵要地誌』(筆者未見)の細部の事項を再編集したものであると記されている(緒言).北満洲兵要地誌細論(シリーズ)は,其1が小白山山脈以西,興安嶺山脈以東の北満洲中央部,其2が興安嶺山脈以西,其3(本書)が小白山山脈以東の地域を分担している(緒言).

No.17. 本資料の対象地域(「アムール」河系)に関する兵要地誌的重要性について,“極東「ソ」領ノ大動脈ヲナシ交通運輸経済住民ノ生活等ニ対シ極メテ重代ナル役割ヲ演シアリ”(第1丁(オ))と記している.

No.18. 本書の対象地域について,“本誌ニ掲クル極東「ソ」領西部地区トハ「チタ」洲並「ブリヤート」蒙古自治共和国ヲ含ム”([序])と記されている.この対象地域の兵要地理上の価値について,“特ニ海拉爾[ハイラル],札賚[來]諾爾[チャライノール],満洲里[マンチョウリー]正面地区ハ「ソ」軍カ満領ニ対シ積極的進入作戦ヲ企図シアル方面ナリ”(第2丁(オ))と述べている.

No.20.本資料は,“本文ハ昭和十三[1938]年九月二十五日調製「黄河氾濫其後ノ変化ニ就テ」以降十月二十日迄ニ得タル第一線諸部隊ノ報告並当部幕僚見聞一括整理セルモノナリ”(見返し(きき紙))と記され,No.21 i)の続編であることがわかる.

No.21.「原本史料経歴票」中の史料批判上参考となる事項において,本資料は“黄河氾濫の実情調査資料.氾濫対策ニ関スル軍及ビ満鉄関係者ノ研究などの資料綴りであり,兵要地誌研究,作戦,治安対策上の基礎資料として参考とする価値あり”と記されている.

No.23. 本書作成のための参考資料として,『江西省経済概要』,『支那水運論』『重慶政府ノ戦時交通政策並建設状況』他が列挙されている.なお,本書はNo.23-Aの改正増補版ではない.

No.23-A. 本書作成のための参考資料として,『江西省兵要地誌概説』(1925年7月,参謀本部調製),『江西省兵要地誌補修資料』(1943年9月,支那派遣軍総司令部調製),『南昌作戦ニ於ケル兵要地誌概況』(1940年1月,呂集団司令部調製)他20余点の兵要地誌・地図および関係資料が列挙されている.

本省の兵要地理上の価値について,“重慶政権抗戦

ノ現段階ニ於テハ西南支那諸省ノ北方廓防地帯トシテ或ハ我ガ揚子江兵站線ニ対スル反抗基地トシテ或ハ又在支米空軍ノ対日反抗ニ為ノ前進基地トシテ…”（第1頁）と記され，軍事上の重要性が認めらる．さらに，経済上の有用性についても述べている（第1頁）．

附録（江西省主要作戦ニ於ケル兵要地誌的体験）において，南昌攻略作戦（1939年3月下旬—同年4月中旬），贛湘会戦（1939年9月上旬—同年10月下旬），浙贛作戦（1942年5月下旬—同年8月下旬）に関する報告を収録している．

No.24.本書編纂のための参考資料として，『湖南省兵要地誌』（1925年2月，参謀本部調製），『湖南省兵要地誌』（1941年6月，支那派遣軍総司令部調製），『第一次長沙作戦ニ於ケル西部第九戦区方面兵要地誌概況』（1941年11月，呂集団司令部調製）他15余点の兵要地誌・地図および関係資料が列挙されている．

本省の兵要地理上の価値について，“最重要資源地就中穀倉地帯トシテ重大ナル価値ヲ有ス”（第1頁），“北，中，南及奥地支那ヲ結ブ重要交通幹線ヲ通ジ交通上ハ勿論軍事，政治，経済上ニ於ケル本省ノ価値大ナルモノアリ”（第2頁），“本省ハ同[在支米]空軍ノ対日反抗ニ為ノ主要基地ト化セリ”（第2頁）と述べている．

No.26. 本資料の成立経緯についてみると，“昭和五［1930］年九月一日補修参謀本部発行「山西省兵要地誌」ヲ骨子トシ既往ノ偵察報告並事変後得タル諸情報ヲ総合作業セルモノナリ”（配布区分）と記されている．なお，配布区分から推定すると，本書は310部刊行された様子である．

No.27. 本省の兵要地理上の価値について，“山東省ハ支那ニ於ケル南北経済中枢ノ中間ニ位シ津浦線［筆者注：天津—浦口間の鉄道］ヲ遮断シ隴海線［筆者注：海州—潼関（予定として蘭州）間の鉄道］ヲ制シ易キヲ以テ其領有ハ華北地方作戦軍ト相俟テ其戦果ヲ確実ナラシメ致命的打撃ヲ与フルヲ得ヘシ膠済線［筆者注：済南—青島の鉄道］延長セラレ京漢線［筆者注：北平（北京）—漢口（武漢）間の鉄道］ニ連絡シ得ルニ至レハ特ニ然リ”（第1頁）とし，交通路としての重要性を強調している．

No.27-A. 本文献は，見出しに若干の相違はあるが，No.27の内容と同一である．

No.28. 配布先（リスト）から推定すると，本書は100部刊行された様子である．

No.29. 本書の成立経緯について，“本書ハ主トシテ現地軍報告ヲ資料トシ大正5［1916］年二月十日調製参謀本部「四川事情」ヲ改訂セルモノナリ”（緒言）と述べている．

本省の兵要地理上の価値について，“山獄地帯ニ依リ天嶮ヲ繞ラシアルヲ以テ要塞ナリ且古来天府ノ地ト称セラルル物資豊富ナル大盆地ヲ擁ス…長期抗戦ヲ呼号シアル所ナリ”（第1頁）と記している．

No.31. 編纂のための参考資料として，『青海省概況』（1942年1月，北支那方面軍開封情報所調製），『青海省事情　其ノ一乃至其ノ五』（1942年，駐蒙軍司令部調製），『西北支那兵要地誌調査資料（甘粛，青海之部）』（1942年8月，華北交通株式会社調製），『青海省資料』（1941年12月，支那派遣軍上海機関調製）があげられている（緒言）．

本省は1928年，甘粛省から独立して一省となった．本省の兵要地理上の価値について，僻遠の位置にあるが，“印度ト西北支那トヲ結新援蒋路ノ可能性”（第2頁）を有しているので注視しなければいけないと述べている．

No.32. 本書作成のための参考資料として，『西康省兵要地誌概況』（1943年3月，支那派遣軍総司令部調製），『靖亜調査資料』および現地軍提出資料等が記されている（緒言）．

本省の兵要地理上の価値について，“大東亜戦争ノ進展ニ伴ヒ相次デ失陥セル米英ヨリノ援蒋路ヲ新ニ本省ヲ経テ直接印度ニ求メントシテ夫々地上及空中ヲ通ズル中印「ルート」ノ建設ニ勉メアリテ其ノ地位ト価値ヲ茲ニ一変セリ，”（第1頁—第2頁）と記し，当時の新しい戦況の変化に対応して，中印「ルート」との関係上，本省を重要視している．

本書の第五，八，九，十，十一章は，挿表・附表を参照することを指示してあるのみで，解説文を付していない．

No.33. 本書編纂のための参考資料として，『支那西北兵要衛生地誌』（1943年8月，甲集団参謀部調製），『支那西北兵要給水地誌概説』（1943年8月，甲集団参謀部調製），『陝西省兵要地誌概説』（1942年2月，参謀本部調製），『甘粛省兵要地誌概説』（1943年3月，甲集団参謀部調製），『新疆省事情』（1943年6月，参謀本部調製）『寧夏省伊克昭盟兵要地誌概説』（1943

年3月，参謀本部調製）があげられている（緒言）．

西北支那の兵要地理上の価値について，古来未開の地域であったが，“支那事変勃発［1937 年］以来西北「ルート」ノ価値増大セルト本地方ガ重慶政権ノ重要抗戦培養基地タルベキトニ鑑ミ近時著シク内外ノ関心ヲ昂ムルニ到レリ”（第4頁）と述べている

No.34. 本書の成立経緯について，“昭和三[1928]年度末迄ニ蒐集セル資料，同三年秋本省ニ旅行セル当部々員ノ報告等ニヨリ明治四十五[1912]年調製浙江省兵要地誌ヲ改編セルモノトス”（緒言）と記されている．

本省の兵要地理上の価値について，“北部浙江即チ杭州以北ノ平野ハ所謂上海ヲ中心トスル江南資源ノ産出地ニシテ経済的ニ重要位置ヲ占ムルノミナラス長江作戦遂行上主力軍ノ行動ヲ容易ナラシムル”（第2頁—第3頁）とし長江作戦上，重要地であると述べている．

なお，『浙江省兵要地誌概説』（1954年6月17日—8月13日，謄写版 手書き）が防衛研究所図書館に所蔵されている．

No.35. 本省の兵要地理上の価値について，“支那本土ノ略々中央ニ位シ恰モ南北両支那ノ政治的経済的分水嶺ヲ成スノ観アリ”（第1頁）さらに“最近航空機ノ発達ニ依リ本省ニ航空基地ヲ求メント全支ヲ制スルニ足ルヘク其価値タルヤ真ニ偉大ナルモノアリ”（第1頁）と記している．

No.35-A. 本書が摘録につき，詳細は次の書物を参照することを指示し，『陝西省兵要地誌概説』（1939年7月，杉山部隊調製），『陝西省兵要地誌概説』（1942年2月，参謀本部調製），『川陝省境兵要地誌概説』（1942 年3月，甲集団調製），『陝西省五十万分一兵要地誌図』をあげている（序）．さらに，巻末に「占拠地域外作戦既調査資料目録」（対象期間：1937 年—1942年2月）が付され，20余点の兵要地誌・地図および関係資料が列挙されている(第40頁—第43頁)．

No.36. 本資料は，旧ソビエット社会主義共和国連邦内の急性伝染病に関する報告等であるが，筆者は日本軍の軍陣防疫の参考として本目録で取り上げた．

No.39. 本書の対象地域である南京（江蘇省）の兵要地理上の価値について，“中支ニ於ケル心臓ヲ形成シ長江作戦軍カ第一ニ目指スヘキ重要地点ナリ”（第1頁）と指摘している．安徽省については，“古来所謂中原ノ地タル河南，陝西方面ト支那ノ宝庫ト目サルル江蘇，浙江方面トノ中間ニ位シテ常ニ争奪ノ焦点トナリ支那兵要地誌上重大ナル価値ヲ認メラレタル地ナリ”（第75頁）と記している．

No.41. 東粤は，広東の別名である．本書の対象地域は，潮州と汕頭つまり潮汕地方である．本書の成立経緯について，“本書ハ昭和八［1933］年台湾軍調製資料ヲ主体トシ日支事変勃発前マテニ得タル資料ニヨリ修正ヲ加ヘタルモノンナリ”（緒言）と記されている．

潮汕地方の兵要地理上の価値について，“汕頭ハ之カ心臓部ニシテ支那東南海岸屈指ノ良港タルヲ以テ之カ占領ハ台湾海峡ノ防衛ヲ容易ニシ…”（第1頁），“潮汕地方ハ南洋華僑ノ主要ナル出身地ニシテ其数ハ二百四十万ニ及ヒ華僑中一大勢力ヲ有シアリ故ニ本地方獲得ハ対蒋経済封鎖ヲ更ニ効果的ナラシメ蒋政権壊滅ヲ促進スルノミナラス対華僑工作ヲ強化セシメ得テ日支事変解決ニ一歩ヲ進メ得ルモノトス”（第1頁）と述べている．なお，華僑については本文中に一章（第135頁）を設けて言及している．

No.44. 本資料の成立経緯について，“本調査資料ハ張家口陸軍病院附陸軍軍医中尉吉村松雄ヲ現地ニ派遣数ヶ月間実地調査セシメタルモノニシテ兵要衛生上好個ノ参考資料タルモノト認ム”（緒言）と記されている．本資料は，参考文献・資料を編纂するのではなく，実地調査上で得られたデータに基づき作成された例である．

西蘇尼特地域の兵要地理上の価値について，“純蒙古地帯ニシテ将来戦ニ於ケル軍事上万般ノ拠点トシテ戦術上ノ意義極メテ重大ナルモノ”（第1丁（オ））と述べている．

No.45. 本資料の成立経緯について，“本調査資料ハ昭和十四［1939］年度ニ於テ張家口陸軍病院附軍医中尉吉村松雄，同島田千尋ヲシテ現地ニ派遣実地調査セシメタルモノニシテ兵要衛生上好個ノ参考資料タルモノト認ム”（序）と記されている．

配布区分表によると，北支那方面軍軍医部8部，第二十六師団軍医部10部，他に18部が病院等に配布された．

No.46. 本省の兵要地理上の価値について，“本省ハ満洲ノ西南部ニ位置シ支那本部並察哈爾ヲ経テ外蒙古ニ対スル連接部ヲ為シアルカ故ニ同方面ニ対スル軍事的将又戦略的ニ一種ノ障壁地トシ若ハ緩衝地帯トシテ重要ナル価値ヲ有ス”（第3頁）とし，さらに“平津

地方領有ノ為…戦略上著意ヲ要スヘキ方面ナリ”（第3頁）と記している．

第六章において，具体的に外蒙古と北支那の二方面への作戦が解説されている．

No.48. 本省の兵要地理上の価値について，“本省ハ我台湾ノ対岸ニ位シ其沿岸ハ幾多良好ナル港湾ニ富ムヲ以テ台湾海峡ノ制扼上極メテ重要ナル価値ヲ有スルト共ニ若シ是等港湾ノ一ト雖之ヲ第三国ノ手ニ落ルニ於テハ我国防ニ甚大ナル影響ヲ与フルモノニシテ本省ノ価値ハ実ニ軍事上ニ存スト謂フヘシ”（第1頁）と述べている．

No.50. 本書の対象地域の範囲は，主とし河北省内の保定，滄縣を連なる線以北である．平津地方の兵要地理上の価値について，“支那ニ於ケル北部政治経済ノ中心地ニシテ政，戦両略上絶代ナル価値ヲ有ス”（第1頁）と述べている．

No.51. 本書の資料的価値について，複製資料経歴票および原本資料経歴書中で“旭組河川運輸部が支那事変中に製作した，いわば支那の河川（運輸上の観点）一覧である．戦史研究の一資料の価値はある．”と記されている．

No.52. 本書の成立経緯について，“本誌ハ衛生勤務ノ参考トシテ昭和三[1928]乃至昭和十一[1936]年ノ調査ニ基キ急拠編纂セルモノナリ”（［序］）と記されている．

No.54. 満洲里の兵要地理上の価値について，“北満鉄西部線ノ最終端ヲナシ欧亜連絡ノ咽頭ニ当ルト共ニ外蒙古方面ニ対スル交通上ノ要衝ヲ占メ戦略的要点ナリ”（第1丁（オ））と述べらている．

No.56. 本書の目的について，“国軍将校ヲシテ平時ヨリ南支那ノ兵要地理，軍用資源及一般社会状態ヲ研究セシメ以軍隊練成ノ参考タラシムルニ在リ”（緒言）と述べている．

No.57. 本書の成立経緯について，“本概説ハ陝西省並ニ河南省兵要地誌概説ヲ基礎トシ最近ノ諸報告ヲ参考トシテ整理セルモノ”（［配布区分等］）と記されている．

洛陽―西安間の兵要地理上の価値として，“日支事変［筆者注：日中戦争］間該当区域ハ敵前線ノ抗戦背後ノ補給線トナリ重要ナル役割ヲ演ジツゝアリ”（第1頁）と記されている．なお，配布区分から推定すると，本書は300部刊行された様子である．

No.58. 隴海鉄道（主トシテ帰徳以東）―揚子江下流（主トシテ南京以東）間の兵要地理上の価値として，“戦略上ヨリ観察スルニ隴海線ニ沿ヒ一軍ヲ西進セシムレハ黄河以北ノ敵ノ補給ノ動脈ヲ絶チ其退路ヲ遮断シ北方作戦軍ト相俟ツテ是ヲ黄河以北ニ於テ殲滅スルコトヲ得ヘク若シ之ヲ逸シタル場合ニ於テモ隴海沿線ニ於ケル再度ノ抵抗ヲ断念セシムルコトヲ得ヘシ更ニ上海方面作戦軍ト策応シ南京ニ向ヒ作戦スルコトヲ得”（第1頁）と述べ，さらに，経済的観点からも重要性を指摘している．

V わが国の兵要地誌目録（1926－45年）の検討

1．調製者別の分析

本目録が取り上げた合計67種の資料の内，合綴資料No.6, 12, 19, 21, 38, 47の内No.12以外の5種は，各々のデータの重複，書誌事項の不明な点が散見すること等から分析のための集計に加えない（以下，本章においては同様の扱い）．

調製者を中央機関（参謀本部，大本営，陸軍省），現地軍・部隊（No.15を含む），調製者不明の三項目に分類してみた．項目別に集計をすると，中央機関42種（全体の67.7%．%値は小数点第二位を四捨五入），現地軍・部隊18種（29.5%），調製者不明2種（3.2%）となった．この結果では，対象期間内の兵要地誌は陸軍の中央機関において編纂されたものが，大半を占めている．「各部隊兵要地誌関係報告資料」[10]（対象年：1936年），「兵要地誌資料目録 自四月十五日至六月十五日][11]（対象年：1940年），「占拠地域外作戦既調査資料目録」（No.35-A）を調査すると，現地の軍・部隊が作成した兵要地誌・地図をはじめ，兵要地誌調査資料，兵要地誌報告，視察記録等の現地調査に基づく資料が多数記載されている（これらの資料は，終戦直後に処分されたのであろうか）．

拙稿の集計上の数字だけで調製者の全貌を知ることはできない．

2．年次別タイトル数の分析

本目録が取り上げた合計67種の資料の内，合綴資料5種および刊行年の不確かなNo.1, 42, 43の小計8種を除き集計した．結果は表1の通りである．

表１　年次別タイトル数

年次	数（種）
1926 年	0
1927 年	1
1928 年	1
1929 年	2
1930 年	0
1931 年	1
1932 年	2
1933 年	1
1934 年	0
1935 年	1
1936 年	0
1937 年	9
1938 年	7
1939 年	11
1940 年	3
1941 年	2
1942 年	4
1943 年	9
1944 年	5
1945 年	0
（合計）	59

本表をみると，1926 年から 1936 年までに 9 種，1937 年から 1945 年までに 50 種が刊行されたことがわかる．兵要地誌作成年次の変化は，蘆溝橋事件（日中戦争の端緒）が勃発した 1937 年直後から急激に増加している様子を示し，戦況を反映しているといえよう．なお，1943—44 年の間における刊行数の増加した原因は判明しない．

3．対象地域別タイトル数の分析

本目録が取り上げた合計 67 種の資料の内，合綴資料 5 種を除き集計した．結果は表 2 の通りである．

表２　対象地域別タイトル数

対象地域	タイトル数	比率（各地域/A）
北支	17	27.4%
中支	7	11.3%
南支	15	24.2%
満蒙	16	25.8%
その他	7	11.3%
合計	62 (=A)	100.0%

%値は小数点第 2 位を四捨五入．

地域におけるタイトル数と戦況との関係を検討したが，筆者は傾向を見出せなっかた．

4．機密度に関する分析

兵要地誌および関係資料の表表紙に印刷あるいは捺印されている秘密の程度（機密度）を表現する語句について検討してみよう．

兵要地誌は軍事上，書類扱いになっている．『陸軍成規類聚』によると，陸軍の軍事上の秘密書類は，「陸軍軍事機密書類」，「陸軍軍事極秘書類」，「陸軍軍事秘密書類」に分類されている（陸軍大臣官房 1941:第 17 類文書　報告 46）．また，寺田（1992:45）は，機密度に関するランク付けの分類として，「軍機」，「軍極秘」，「極秘」，「秘」，「部外秘」の五段階を示している [12]．この二つの記述を参考にして，対象としている兵要地誌に使用された機密度に関する語句を整理してみよう．機密度の高いレベル順に「軍事極秘」，「極秘」，「軍事秘密」，「秘」・「秘規則適用」，「部外秘」，「（取扱注意）」であろう．各レベルに分類される資料数（合計 67 種から合綴資料 5 種および無記載の資料 10 種を除き 52 種）は表 3 の通りである．

表３　機密度別タイトル数

レベル	頻度(種)
軍事極秘	1
極秘	5
軍事秘密	26
秘	13
秘規則適用	4
部外秘	2
(取扱注意)	1
（合計）	（52）

機密度を表記した全資料中，「軍事秘密」レベルの資料が半分を占めている．

5．主題（衛生）に関する分析

本目録で対象とした兵要地誌の内，I の 2 で述べたタイプ 2 および 2 と 3 との混成型つまり地域単位で主題を扱う地誌について調べてみよう．

本目録にみられる主な特定の主題は衛生である．衛生の内容は大別すると，人衛生と獣（医）衛生あるいは馬衛生に二分される．両方共に特定の軍事地域の兵要地誌においても言及されている．

戦役時，兵士の死没原因は，敵側の攻撃によるももだけではなく，多くの割合を戦病死が占めている．陸軍の死没者数の統計によると，日清戦争（1894-95 年）

時 13,488 人，内戦病死者数 11,894 人（88.18%），日露戦争(1904-05 年)時 84,435 人，内戦病死者数23,093 人（27.35%），シベリア出兵（1918-22 年）時 3,116 人，内戦病死者数 1,717 人（55.1%）（原・安岡 1997: 附表 498 ）．このような数字から，陸軍は，進攻作戦の実施に際し，兵士の衛生（環境）に配慮をしなければならなかった．

本目録中，人衛生を主題にしている文献は，No.1, 2, 3, 14, 18, 33, 36, 44, 45, 52 の 10 種である．獣衛生を主題にしている文献は，No.37, 37-A の 2 種である．資料数 12 種の全体（合計 67 種から合綴資料 5 種を除き 62 種）に対する比率は 19.35%である．

6．内容・構成にかんする分析

本稿Ⅰの 2 で示したタイプ 3 の兵要地誌の内容・構成は，原則的に用兵的観察（総説），地形および地質，交通および道路，通信，航空，気象，衛生，宿営および給養（人馬の生存に必要な物資を供給すること），住民地および住民（教育，宗教，風俗等），主要都市からなり，著者等はそれらについて解説を試みている．自然・人文地理学および関連分野の項目以外である度量衡，産業等についても言及している文献もみられる．これらのすべての項目は，軍事作戦を現地で遂行するために必要な予備知識である．そのため，地形を記述する際，単に地形学的視点から地勢を述べるだけではなく，戦略上，対象地域が馬，車両の行進に可能な土地か否か，あるいは，上陸可能な地点を有しているか否か等の問題を著者等は論じている．一見，度量衡は，軍事作戦と無関係に思える．しかし，軍隊は物資調達のために各地の度量衡システムを知らなければならない[13]．

本文中の地図・表と同様に，本文から独立した多数の附図・附表（各々を袋に入れている場合もある）が有用な役割を果たしている．本文の内容を理解する手段と同時に，軍事戦略行動を行う上でも重要なツールであったと思われる．一例として，No.24 の附図 第二 湖南省主要作戦路概見図（袋に「軍事秘密」と印刷） を取り上げ，解説してみよう．本図は，本文の主要作戦路を理解するのに役立つように作製された附図（4 色刷り図）である．縮尺は“1/100 万”．作戦路を記載し，図中に“破壊道路ハ駄馬ヲ通ズ”，“巾 1.5m 以下 中央敷石アリ”等の戦略上の注記が付されている．

本稿を作成するにあたり，細谷新治一橋大学名誉教授に貴重なご助言を賜った．研究の一部は，1999 年度文部省科学研究費補助金 基盤研究（B）(1)「地政学・植民地主義との関連からみた近代日本の国家形成および地理・空間の思想」（研究者代表 水内俊雄 課題番号 10480013）の研究集会（2000 年 1 月 30 日，白浜町）で発表し，参加者から有意義なご助言がなされた．資料の閲覧・貸し出し等について駒沢大学図書館，防衛研究所図書館に便宜を図っていただいた．以上の方々・機関に厚くお礼申し上げる．なお，本稿は，前記研究費補助金を使用した．

注

1）本書の再刻（版）である『兵要日本地理小誌』改訂（1875 年 7 月）では，“陸軍諸士”が“陸軍軍人”（中根 1875:第 1 巻 第 2 丁(オ)）に変えられている．

2）もり（1995:174）によると，分類項目名 兵要地誌は 戦争地理と同義語（類語）として扱われている．

3）Peltier, L. C. and Pearcy, G. E（1966:18-19）を参考にする．

4）兵要地誌を戦略における事前の準備・用意に使用した実話を記している著作としてつぎのものがあげられる．辻 政信（1902-？） 1967.『ノモンハン』原書房．本書第 68 頁―第 77 頁において，1939 年 5 月，辻は，ノモンハンの特性をしるために兵要地誌を勉強したことを記述している．

5）本目録は，終戦後にアメリカ軍に押収され，アメリカにおいて編集・マイクロフィルム化された目録 *Checklist of microfilm reproductions of selected archives of the Japanese army, navy, and other government agencies, 1868-1945.* の日本語版（軍事史研究会[編]，19-，174p）である．

6）所属部課名は，部内では通し番号による課番号が付されていた．しかし，分掌任務に基づく通称（例えば，欧米課）がより通俗であった．班名も同様である（日本近代史料研究会 1971：382）．

7）日本近代史料研究会（ 1971：383-385）の「参謀本部の主要班長一覧」によれば，1915 年 1 月 1 日から 1938 年 1 月 1 日までの「兵要地誌班」（独立）を担当する班長名が記載されている．

8）大本営は，戦時あるいは事変に際して設けられる最高統帥機関である．大本営の編成は，大本営陸軍部と大本営海軍部とからなる．日中十五戦争時には，1937 年 11 月，支那事変（日中戦争）の拡大に伴い設置された．

9）本書の正編である『地理学を学ぶ』の中で，竹内は，“対話の世界が，それ自体独自の世界を形成しているということは，対話における発言を文書資料の補完物と考えたり，あるいは，対話における発言を，文書資料などによって確認したり，訂正したりすることは，さしあったて避けなければならないということを意味する．”（竹内・正井 1986：

346）と述べていることを付記しておく．

10）本資料は，5）の目録に記載されているT1016「資料月報 第24号」の中に収録される．

11）本資料は，5）の目録に記載されているT976「昭和15年度北支那方面軍兵要地誌調査計画」の中に収録される．

12）海軍においては，機密度のレベルにより文書の表紙の色が決められていた．軍機は紫色，軍極秘・極秘は赤，秘はピンク，部外秘は白（寺田 1992：45）．しかし，筆者の調査の範囲内では，陸軍は軍事秘密に赤・白・ピンク，秘に赤・ピンク等を使用している．従って，規則性を見出すことはできなかった．

13）軍における度量衡の知識の必要性について，No.8の著者は，“支那ニハ国定度量衡ヲ有スルモ旧来ノ習慣ニ依リ各地各様ニシテ殆ト拠ル所ナシ然レトモ物資蒐集ニ際シテハ各地ノ習慣ヲ顧慮シ秤量ニ留意スルコト肝要ナリ”（47）と記し，各地の伝統的計量法を例示している．

文献

小川琢治・太田喜久雄 1937.『戦争地理学』地人書館．（地理学講座 修正版）．

神谷 誠 1995.『南方軍総司令部参謀部兵要地誌班回顧録――岡さのへち会記念文集』創栄出版（制作）．

国分直一博士古稀記念論集編纂委員会 1980.『日本民族文化とその周辺 歴史・民族編』新日本教育図書．

杉田一夫 1958.『南方作戦兵要地誌資料収集』．

大本営陸軍部 1943.『大本営陸軍部幕僚業務分担規定』大本営陸軍部．

竹内啓一・正井泰夫 1986.『地理学を学ぶ』古今書院．

千葉徳爾 1991.『はげ山の研究』増補改訂（版），そしえて．

寺田近雄 1992.『日本軍隊用語集』立風書房．

内閣記録局 1977.『法規分類大全・第46巻 兵制門［2］』原書房．（覆刻原本 1890年刊）．

［中根 淑］1873.『兵要日本地理小誌 1』陸軍兵学寮．

中根 淑 1875.『兵要日本地理小誌 1』改訂 陸軍文庫．（筆者未見）（筆者蔵書本は1876年第1月翻刻免許）

日本近代史料研究会 1971.『日本陸海軍の制度・組織・人事』東京大学出版会．

秦 郁彦 1991.『日本陸海軍総合事典』東京大学出版会．

原 剛・安岡昭男 1997.『日本陸海軍事典』新人物往来社．

堀内文次郎・平山 正 1986.陸軍省沿革史．文献資料刊行会．『明治前期官庁沿革誌集成 2』1-78.柏書房．（覆刻原本 1905年刊）．

正井泰夫・竹内啓一 1999.『続・地理学を学ぶ』古今書院．

もり・きよし 1995.『日本十進分類法』新訂9版（本表編）日本図書館協会

諸橋徹次 1956.『大漢和辞典 巻2』大修館書店．

陸軍大臣官房 1941.『陸軍成規類聚 第6巻』第30版，川流堂．

渡辺 光 1960.日本の地理学の戦後の動向．地学雑誌 718：145-152.

Peltier, L. C. and Pearcy, G. E. 1966. *Military geography*. Princeton, N. J.: Van Nostrand.